

社会教育による地域の教育力強化プロジェクト実証的研究報告書

地域支援人材の養成

NPO法人 ひと・まち ネットワーク



ご あ い さ つ

地域活性化に資する人材の育成をめざして

茨城県は、全国に例を見ない「茨城県生涯学習圏構想」に基づく5つの県立生涯学習センターを整備し、県や市町村等の行政と社会教育関係団体、グループ等が連携し、多くの市町村や地域で優れた実践事例を生み出し、生涯学習社会の構築に大きな成果をあげて参りました。

しかし現在、国や県の生涯学習・社会教育の状況を見たときに、それらを取り巻く環境は厳しい状況にあります。

本県が生涯学習・社会教育の面で蓄えてきた知恵と能力を再結集し、自分たちの力で生涯学習社会の実現に向けて活動しようという決意のもと、平成21年7月13日に「NPO法人ひと・まちなつとわーく」を設立いたしました。

県民の皆様の様々な学習活動の手助けや環境整備をするとともに、茨城県の生涯学習・社会教育の更なる発展に寄与することを目的とするものです。

県民や大学関係者、社会教育主事有資格者、各市町村で活躍しているグループや団体、行政関係者を会員にして、社会教育の推進、まちづくりの推進、男女共同参画社会の形成の促進、子どもの健全育成を図る活動をして参りました。

昨年度は、文部科学省の委託事業「NPOを核とした生涯学習活性化事業」で全国4NPOの一つに選ばれ、江戸しぐさに学ぶ「市民道徳実践運動」（茨城しぐさ運動）を実施いたしましたが、今年度も文部科学省の「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」事業の委託を受けることになりました。

この事業は、教育力の低下や核家族化、少子化など地域が抱える課題や地球温暖化などの国を挙げて緊急に取り組むべき課題等を社会教育施設や地域社会の住民が協働してこれらを解決する仕組みづくりを目指すものであり、国とNPOが共同で地域の教育力向上のための取り組みモデルの構築を目的にしております。

そこで、NPO法人水戸こどもの劇場と協働で、水戸市の良いところを再発見しよう、それも子ども達と大人が共同作業する中で大人と子ども達の絆づくり、具体的には、観光マップづくり、手紙のワークショップ、ラジオドラマづくり、映像ワークショップCMづくり、観光プランづくりを通して、参加者の相互理解を深めるとともに穏やかなネットワークを築くことです。

新しい視点での観光資源開発過程の中から、地域活性化に資する人材の育成や社会教育施設と団体間のネットワーク構築、生涯学習・社会教育と学校教育との有機的連携などを通し「地域支援人材養成」の取り組みモデルが生まれるのではないかと考えております。

この事業や日常の活動を通しまして、微力ではありますが茨城の生涯学習・社会教育の推進にお役に立てれば幸いです。と思っております。

今後とも、皆様方のご理解、ご支援、ご協力をお願いいたしましてあいさついたします。

NPO法人ひと・まちなつとわーく
理事長 小野 起 玄

事業を終えて

「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」6事業を8月から実施いたしました。

水戸こどもの劇場は創立から40年、NPO法人設立から12年が経ちました。

創立当時の会員のための活動から、NPO法人として再出発してからは地域に広げた活動を展開し、昨年の活動参加延べ人数2万人、回数は700回を超えました。

その時代その時代で子どもに何が必要か、子どもを主体として活動を創っていくときに、大人がどう関わっていくかを考え実践し続けてきました。

今回、この事業では、今まで実施してきた活動を更に発展させ、子どもの主体的な関わりは勿論、地域の各団体と繋がり、色々な知恵を出し合い、一つ一つの事業を参加者で発展させていく事を目的として出発しました。

はっきりと決まった事を実施していくのは、分かりやすく伝えやすく、時間も労力も少なく済みます。参加者募集の時に何をするとという事がはっきりしていないと集まらないという色々な問題点にすぐにぶつかりました。結果が見えない活動に自分で創造するという事に大人も不慣れで参加の人数が少なくなっていました。

しかし、手探りながら参加者が、ひとつずつ実施していく中で、年齢に関係なくイメージが広がっていき、この活動の面白さが実感となって、関わった人たちが再確認していきました。

今回の事業を水戸こどもの劇場が実施させていただき、更に発展させていくために少しずつ地域と繋がり広げていきたいと考えています。

このような事業に関われたことを感謝いたします。ご協力いただきました、皆様、講師の方々本当にありがとうございました。

NPO法人水戸こどもの劇場
代表理事 森田 多美子

目次

ごあいさつ	1
はじめに	4
事業報告	6
事業概要	7
ワークショップ	8
ワークショップのまとめ	24
シンポジウム	27
アンケートから	37
考察とマニュアル	42
まとめのまとめ	43
社会教育の可能性とマニュアル化の課題	45
資料	52
資料 1 実施体制図	
資料 2 チラシ	
資料 3 アンケート	
資料 4 市民からの返信	



はじめに

1 企画の背景

情報化の進んだ現代では、大都市発信の情報は、全国各地隅々に伝達されており、どんなに都市部から離れた離島に住んでいる人々にでも渋谷や原宿などの情報がリアルタイムで届けられる。また、現在50歳以下の世代は、テレビ情報の中で育った世代であり、その情報の多くは、大都市発信で、それらは個人の価値観に大きな影響を与えており、特に若者世代の関心は常に大都市を向いているという時代が長く続いた。しかし、近年のICTの発達は、過疎の村や離島からでも個人の情報発信を可能にし、多様な場所、多様なルート of 情報を獲得することができるため、若者世代から徐々にではあるが、既存の価値観とは違って地方の魅力に注目した活動が生まれ始めている。ただし、それは、ICTの技術を使いこなすことのできる一部の僅かな人々であり、地域の価値観は未だに大都市偏重のままである。昨年末に発表された地域ブランド調査によると、茨城県は47位、2年連続で魅力度最下位となった。これをどうとらえるか、様々な読み解き方があると思われるが、他県に比べて、茨城県の人々の価値観が大都市指向であり地元地域を意識することの少なさが現れたものともいえるだろう。ブランド総合研究所では郷土愛、自慢度のランキングも行っており、茨城県はどちらも46位という結果であった。ふるさとを誇りに思う要素が「自然」と「食事」であるにもかかわらず、豊かな自然が残り、多様な植物の南限、北限が混在し、暖流と寒流の豊かな海に面しており、食材に恵まれた茨城だが、出身者における評価は低い。

県庁所在地である水戸は、約26万人の人口を抱えており、地域の経済を支えてきた産業は、小売業などを含む第三次産業が主である。近年では、近隣の大型ショッピングセンター開発などが影響して、中心市街地の集客力が低下、大型店が次々に撤退することにより、小売業、飲食業が減少、空きビル、空き店舗の増加が顕著にみられ、負のスパイラルの中にある。これらは、地方都市に共通した問題であると思われるが、その現実が住民に与える影響は大きい。

しかし、水戸では、水戸芸術館のアウトリーチプログラムによるアートを媒介とした若者のネットワークや商店会の若手店主らによる自主的な市街地活性化の活動、町おこしの映画づくりなどにより、小さな動きではあるが、主体的な地域活性化への取り組みが始まっている。また、日本三大名園の一つである偕楽園公園を有する立地にあるため、以前より観光ガイド養成への取り組みもあり、意識の高い一部の人々にとっては、様々な機会が提供されている。

それにも拘わらず、茨城や水戸が魅力のない地域と認識されるのはなぜか。それは、固定化された一部の人だけに情報が偏っていること、子どもでも参加できる身近な機会が少ないことが原因しているのではないかと考える。また、既存の都会中心の消費社会の価値観では、地方都市の魅力を発見することはできない。東京や大阪を目指してもそれを超えることは至難の業に思える。しかし、実際に若者に注目され活気を取り戻しているところも全国には点在しており、その上勝や杖立、おぢかなどの先行事例を検討してみると、外部の視点を取り入れながら、その土地を再発見しながら地元拘った固有の価値観をボトムアップで手に入れているところが際立っている。それらを軸に地方都市の活性化へのプロセスを考えていくことは可能かもしれない。自然に囲まれた過疎の村でもなく、都会ともいえない、さらに東京から特急に乗れば1時間半ほどの立地にある水戸再発見するには、既存の価値観にない視点を得ることが必要ではないかと考えた。日頃、一般的に考えられている観光や旅行が価値のある場所に出かける楽しいことであることを活用して、地域をポジティブフィードバックすること、それを可能にするには、もっと身近な日常から観光という新たな視点でとらえ直してみるのが重要であろう。

2 プロジェクトの課題

前述の背景からみえる茨城に、水戸に必要な人材とはどんな人なのだろう。どんな人材を育成するのは大きな課題である。本プロジェクトでは、(1)地域の価値を再発見すること、(2)観光や旅行に対する認識を見直すこと、(3)多様な人々が出会い、緩やかにつながる仕組みをつくること、から地域への愛着を育て、郷土愛を育み、持続可能な社会を実現するための地域人材を育成しようと試みる。そのために①視点を変えること、②他者と出会うこと、③土地と出会うこと、④自分を発見すること、⑤学びを分かち合うこと、のできるプログラムを検討し、試行することによって、他者を尊重しながら、地域を常にとらえ直し、その課題を他者とともに発見することのできる人材、また、他者を巻き込みながら課題解決に向き合い、その実践の中から学び、知識を他者と共有しながら、次の問いに出会い学び続けることのできる集団の育成を試みる。ワークショップ実施後は、参加者と共に実践を振り返り検討しながら、プログラムのブラッシュアップを行う。さらに、実践全体へのスタッフの振り返りとシンポジウムの開催によって、地域活性化と地域人材育成への地域社会の可能性を考察しようとするものである。

そのために①の実現には各種メディアを活用し、②には水戸以外からのファシリテーターを迎え、多様な参加者を、③にはフィールドワークを、④、⑤には参画への仕組みを検討しながら、参加を考えるワークショップ、マップづくり、手紙のワーク、ラジオドラマ、CMづくり、観光プランづくりの6つのワークショップを実施する。スタッフには参加者とともに学びをつくっていくのだという共通認識を求め「参加を考えるワークショップ」をワークショップ実施前に行う。ワークショップという学びは「参加の学び」であるため、参加者の主体性を尊重しながら、支援者としての立ち位置を確認し、ともに学び合う双方向の学びを目指す。

ワークショップは参加者を一般公募するか、あるいは団体単位の参加を促し、関係者の動員は行わない。最後に、実施したワークショップの報告会とシンポジウムを社会教育関係者に向けて行い、本プロジェクトの成果と課題を確認し、観光や街づくりに対する社会教育のあり方を検討する。

事業報告



事業概要

1 具体的実践の概要

地域のガイドマップ、誰かを応援するプロジェクト、ラジオドラマ作り、コマーシャルフィルムの作製を通して、普段、何気なく見過ごしている居住地の魅力を再発見し、郷土愛を深めるとともに、作業を通して地域における大人と子どものつながりを深め、ともに郷土の明日を作る仲間として学びあう関係性を育てる。

また、その学びを通して発見した地域の観光資源を活用した観光プランの開発を行う。

これらの成果は、プロセスを含めた状態でまとめ、次年度以降にテキストとして活用できるような報告書を作成し、関係団体に配布する。

2 趣旨

世界規模の経済変化に危機感を伴ってOECDによってまとめられたキーコンピテンシーを身につけるためには、生涯学習と学校教育の連携が不可欠であり、今後の街づくり、地域開発には子どもや若者の参画が必要である。なぜならば生涯学習における学びの中心は「参加」という学びであり、人々が主体的に参加することによって地域課題を明らかにし、その解決に向けた学びを企画して、その学びから実践を作り出すこと、すなわちOECDが示す多様な人々との協働、主体的に生きるということを学ぶことでもある。そして実践は、次の出会いと課題の発見を生み、それが次の学びへとつながって学び続けるコミュニティが形成されていく。それこそが私たちが知識基盤社会を生き抜くために必要なスキルであり、それを身につけるための知見は生涯学習、社会教育の分野にある。そしてその学びを可能にする支援者の役割とは、一般市民に向けてこれらの学びのサイクルへの入り口を示すことにあるのではないだろうか。

本企画は、要項に示された観光ガイドの養成を基に地域の現状を加味して、市民の主体的学びを創出するための基盤整備と位置付ける。水戸市においては、既に青少年を含む観光ガイドの養成がなされ、観光スポットである偕楽園等を中心にガイド実践の機会もあるが、開始からしばらくの時間が経過した今日では、かかわりが限定された取り組みになっており、広く市民がかかわる場になっているとは言えない。また、経済発展を遂げた我が国における近年の観光ニーズとして、歴史的建造物、自然の風景などだけではなく、そこに暮らす人たちとの交流、ということが大きな要素となりつつある。

これらの現状を踏まえ、地元で暮らす私たちの日常を観光、という視点で見直し、当たり前の暮らしの中にある価値に気づくためのワークショップを開催し、生活の中で無意識に見過ごしているモノやコトを意識化することで、私たちが暮らす郷土を再発見しようとする。そして、それらの活動を通じた出会いとつながりによって、地域リーダーを学びあう集団として育成するとともに各個人の郷土愛を深め、新しい視点での観光資源開発による地域活性化に資する人材の育成を目指す。さらに、様々な施設や団体との協働という場をつくり、日頃、個別に活動している社会教育施設、団体間の緩やかなネットワークの構築を試み、生涯学習、社会教育と学校教育の有機的連携の一助となるためのプログラムを実践し、生涯学習の可能性を検討する。

ワークショップ



I 実践報告

実践1 参加を共有するワークショップ

1 目標

参加についての知識、意識、スタッフに必要とされることを共有し、参加者の主体的な関わりを引き出す「場」をつくるための視点を学ぶ。

2 事業概要

1) 対象者 アシスタントスタッフ

2) 事業日等 8月8日(日) 10:30~12:00 市福祉ボランティア会館 ミオス
参加者: 10名

ア 準備 参加の指標カード、模造紙、マーカー等

イ オリエンテーション (5分)

- ・ 自己紹介
- ・ グループ分け3~5人
- ・ このプロジェクトの目的、内容について説明

ウ グループワーク

- ・ ロジャー・ハート(2000)の参加のはしご

非参画 {
1. 操り参画
2. お飾り参画
3. 形だけの参画

参画の段階 {
4. 子どもは仕事を割り当てられているが、情報は与えられている
5. 子どもが大人から意見を求められ、情報が与えられる
6. 大人が仕掛け子どもと一緒に決定する
7. 子どもが主体的に取りかかり、子どもが指揮する
8. 子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する

「子ども」を「参加者」に、「大人」を「主催者」に置き換えて読んでみよう。

- ・ 参加の各段階についての確認
自分の経験を出して確認。
- ・ なぜ子どもや青年など多様な人たちの参加が必要なのか
今の社会をつくっているのは大人だから。
違う視点が得られるから。
- ・ このプロジェクトは、どんな段階?
第6段階→第7段階→できれば第8段階
へ行ければよいのでは?
- ・ そのためには何が必要?
アイスブレイクが必要。
作業から始める。動く。

ゆっくりとした待つ時間が必要。
意見を全部文字にして、否定しない。
参加者が楽しいこと。笑えること。リラックスできること。
子どもの参加者の場合、親はいない方がいい。
親のケアが必要。親と子は別のグループに。
参加者が大人でも子どもでも分かるように情報を伝える。
スタッフ側の目的や意識を統一しておく。
話し合いの中で、変化していくことを楽しもう。
分からない大人も大歓迎。

3 自己評価等

参加についての意味、求める段階、そのために必要な手法を共有できた。
スタッフ間のつながりができた。

4 反省点・課題等

1) 参加者が少ない

スタッフ全体に必要な参加についての共有ができなかった。

2) 事業時間が適当か

事業時間を 2 時間(120 分)が適正か見直しが必要と思われる。取材対象への十分な時間配分やマップ制作及びふりかえりの時間不足が感じられた。

最低でも取材とマップ制作はそれぞれ 2~4 時間とし 2 日間をかけ、作業時間を充実させ、学びを深化させたい。

5 事業風景



実践2 観光マップをつくろう

1 目標

居住地の魅力を再発見するために、「地域のガイドマップづくり」を行い、地域内の様々な場所を新たな視点で見直すことで、普段、何気なく見過ごしている居住地の魅力を再発見し、郷土愛を深めるとともに、作業を通して地域における大人と子どものつながりを深め、郷土の明日を作る仲間として学びあう関係性を育てる。

- 興味をもって見る
- 新たな視点を発見する

2 事業概要

1) 募集方法 チラシ 4,000枚(市内小学校及び公共施設等)

募集期間 7月20日から8月10日

2) 事業日等

No.	開催日	会場	参加人数
1	8月18日(水)晴れ	内原市民センター	8人(0人)
2	8月19日(木)晴れ	常磐市民センター	8人(3人)
3	8月29日(日)晴れ	竹隈市民センター	17人(4人)

* ()は小学生の参加数

3) 事業手順(当日)

ア 準備 名簿(氏名、年齢、性別)、大体の地図を記入(模造紙6枚分)

イ オリエンテーション(10分)

- ・ 自己紹介
- ・ グループ分け(カメラマン、記者、同伴(安全管理:大学生以上)3~5人
小学生の場合、同伴者が必須。
同伴者は、子どもの背中を押す感じ。
- ・ ルール説明(探検隊の取材心得(5カ条))
 - ア) 車に注意する
 - イ) 出会った人にあいさつする
 - ウ) 取材:他人に教えたいもの、ことを探す
 - エ) 人にインタビューする(聞き込み)
 - オ) カメラ操作説明(取れた写真に名前を付ける)

ウ 取材(わが街探検)(60分)

- ・ 大体の範囲を決める
- ・ 地図を渡す

エ マップ制作(30分)

- ・ 写真を貼る
- ・ 路地、目印は追記可能

- ・ 取材情報を記入する。

オ ふりかえり (20分)

- ・ マップを囲み、取材内容を共有する
- ・ マップに表題を付けて完成

3 自己評価等

1) 街の魅力発見

普段見落としがちな地域の風景や位置関係に気付くことができた。

2) 郷土愛を深める

観光情報としてのまとめができなかった。

魅力の共有ができなかった。(振り返り時間不足)

3) 地域の人と交流

街を歩きながら、素材を探すことにより、出会った人に主体的に会話を持ちかけた。

子供たちと出かけ、予想外と出合いや意外な発見に遭遇できた。

(出入り禁止(民家の中庭)、撮影禁止(店舗の中)が可能になる場合がある)

存在は知っていたが、詳細が分からない地域資源を改めて調べ確認できた。

4) 参加者の学び

取材過程での街歩きの楽しさを実感できた。

地域住民との会話、交流から個人的な対話、まちの記憶を聞くことができうれしかった。

いつもの街が違って見えた。

参加者、住民等との共有ができなかった。

5) 地域貢献(観光貢献等)

街歩きによりマップは完成したが、製品化に至らず満足度が低い。

4 反省点・課題等

1) 参加者を一般募集したが、集まりが悪い。

子どもたちへ観光を目的としたマップを作ることへの動機付けが不足したため、参加人数が少なかった。今後、一定数の参加者見込める団体等へのプログラム提供を検討する。

2) 事業時間が適当か。

事業時間を2時間(120分)が適正か見直しが必要と思われる。取材対象への十分な時間配分やマップ制作及びふりかえりの時間不足が感じられた。

最低でも取材とマップ制作はそれぞれ2~4時間とし2日間をかけ、作業時間を充実させ、学びを深化させたい。

3) マップ制作の自由度が不足気味

作業効率を上げるため、主要道を記載したマップをベースに写真貼りつけとコメントの記載を作業課題としたが、マップデザインを参加者の発想で作成して個性的な観光マップ作り

を体験させることが必要でないか。
(マップの製品化プロセスでの学びの時間)

5 その他

打ち合わせの段階から、当日の参加者の気付きに沿って緩やかにプログラムを変更していくことを確認した。

第一日目の写真の中にあつた「人物」に参加者が興味を示したことから、各グループで1枚以上の人物を撮ることを次回プログラムに追加した。

第二回目の参加者から人に声を掛けるにはどうしたらいいか、という問いが出たので、参加者とともに考え、写真を撮っていいか確認すること、被写体になってくれた人の地域自慢を聴くこと、ということを追加し、子どもたちが何をしているのか説明することが難しい、という意見から、簡単な趣旨が裏に印刷されたネームを使用することにした。

第三日目には、子どもと大人の組み合わせについての課題を確認。次回、それに配慮したプログラムを企画しようと考えている。

6 事業風景



実践3 手紙ワークショップ

1 目標

知らない誰かとのコミュニケーションの機会から何を感じるのかを探る。

同じ街に暮らす知らない誰かだからこそ、地域のぬくもりや地域にやさしい空気感を作ることにならないか、子どもたちの地域社会への信頼を高めることを目標とする。

- まちの人を知る
- つながりを知る、感じる

2 事業概要

1) 募集方法

水戸市好文カレッジを通して市内の学童クラブに参加依頼。放課後子ども教室に協力依頼。
茨城放送出演

2) 事業日等

No.	開催日	会場	参加人数
1	12月18日(水)晴れ	水戸市東部図書館	24人(24人)
2	1月9日(日)晴れ	外野小学校	45人(45人)
3	1月19日(水)晴れ	吉沢小学校	33人(33人)
4	1月19日(水)晴れ	水戸駅南口	100通配布

* ()は小学生の参加数

3) 事業手順

(手紙作り当日)

ア 準備 画材(マーカー、色紙、布、ボタン、ビーズ、リボン、クレヨン、封筒)

イ オリエンテーション(10分)

- ・ ファシリテーター、アシスタントの自己紹介。
- ・ 紙作りの説明
- ・ 郵便屋さんパフォーマンスの紹介。

ウ 手紙作り

- ・ お父さん、お母さん、先生、みんなのために働いてくれる人に応援の手紙をつくろう。
- ・ 街の中にいる知らない人だけどみんなのために働いてくれている人はどんな人?
- ・ 知らない誰かを応援する手紙を書こう。
- ・ 書いた手紙を封筒に入れて、応援ポストに入れよう。

(郵便屋さん)

ア 準備 赤の帽子、赤のバッグ、応援ポスト

イ 子どもたちの手紙を配る

- ・ 仕事帰りの人が多く通る場所に集合
- ・ 声のかけ方を決める

- ・ 手紙を配る

3 自己評価等

1) 街の魅力発見

街にはいろいろな仕事があることを知った。“知らない誰か”ということが、低学年には難しく、ファシリテーターの声のかけ方によっては子どもたちが戸惑い、イメージを膨らませることが難しかった。

2) 郷土愛を深める

“知らない人に近づいてはいけない＝知らない人は怖い”と思っている子どもも多かったが、知らない人が自分たちの暮らしを支えていることを知って、地域の人に「ありがとう」と言いたいという子どもも多くいた。

返事を書ける仕掛けを作っているため、受け取った子どもたちの心に残るであろう記憶にも期待できる。

3) 地域の人と交流

手紙配りのパフォーマンスは、直前のラジオ放送の影響もあってか、スムーズに進んだ。

手紙を読んだ後に、「こんな取り組みはいいね、続けてほしい」「どんなグループがやっているのか？応援したい」など、直接声を掛けてくれる人たちが現れた。

112 通配布して、現在までに 11 通の返信があった。子どもたちへの感謝を綴ったもの、励ましなどが書かれている。(資料参照)

4) 参加者の学び

測定が難しい。

子どもたちの視点に広がりがあったが、手紙をつくることに集中する中で、終わった後にそれがどのくらい定着しているか確認が難しい。

5) 地域貢献(観光貢献等)

一度だけの開催では効果が上がりにくい。継続した取り組みになれば、水戸で働く人たちを応援し、勇気付けることになると思われる。

4 反省点・課題等

1) 対象者の選択と募集

企画と子どもの年齢との関係性をもう少し意識する必要があると感じられた。放課後子ども教室においては高学年の参加もあるため、活動がスムーズであったが、学童クラブでは、3 年生までの子どもたちが対象となったため、目的を伝えることが難しかった。

しかし、公募型での実施では出会うことの少ない子どもたちに出会うことができた。近年、体験型学習の必要性への認識も広がり、学校支援地域本部や放課後子ども教室など、スクールボランティアが教科学習につながる場面も増加しており、学校を拠点とするコミュニティ開発には、社会教育と学校教育の連携がますます重要さを増して行くだろう。

2) 生涯学習や街づくりにおけるアーティストの役割と可能性

今回、若手のアーティストを企画から、ファシリテーションまで起用したが、子どもから大人まで、アートが人を引き付けることには確実に力がある。チラシ一つとっても、市民の注目

度が上がり、パフォーマンスを成立させる「場」作りにも効果的であった。

下見を兼ねた8月の打ち合わせから、数多くの打ち合わせを重ね、その間、クリスマス期間のお手紙バスのアイデアや手紙に特産品を付けて配るアイデア、路上手紙屋などたくさんのプランの実現可能性と目的への効果を探り、最終的には最初のプランに落ち着いた。この間、メール、電話などでのやり取りを重ねたが、Skype の会議は有効だったように思う。全員が情報を共有する中で、同じ時間を使うことが大事だった。

しかし、アート作品として考える作家と街づくり、人づくりの基盤となろうとする生涯学習が目指すもののすり合わせが難しく、打ち合わせにさらにたくさんの時間が必要であった。双方が全体的に一致して必ずしも一つの目標に向かうものではなくてよいと思われるが、双方の目指すものの中で、お互いの中心がどこにあるか、相互の許容範囲を相互理解しておくことは重要である。子ども観や子どもを取り巻く現在の環境、地域の価値観などの情報提供を行うことは不可欠である。参加を共有するワークショップは、地元のアシスタントスタッフだけではなく、外部の講師にもしっかりと参加してもらった必要があると感じた。

5 事業風景



実践4 CMづくり（水戸のCMをつくろう）

1 目標

レンズを通してみる景色。街の人たちは、いつもと何が違って見えてくるのではないか。「伝える」を視点に、多様な年代との交流、作業を通しての新たな、気づきに繋がると考えている。CMづくりが、新たな街自慢が生み、地元への愛着が生まれてくることを目標とする。

- 外部の人の視点を知る
- まちの物語（歴史）に出会う

2 事業概要

- 1) 募集方法 チラシ 5,000枚（市内公共施設、茨城大学、市民講座等）
- 2) 事業日等

No.	開催日	場 所	参加人数
1	12月5日(日)晴れ	市男女平等参画センター	7人
2	12月11日(土)晴れ	南町周辺(中心街)	8人
3	12月12日(日)晴れ	南町周辺(中心街)	10人

- 3) 事業手順(第1日)
 - ア 準備 撮影機材、パソコン、プロジェクター等
 - イ オリエンテーション(15分)
 - ・ 自己紹介
 - ウ まちCMサンプル鑑賞(15分)
 - エ 制作会議(90分)
 - ・ どんなCMにしたいか、伝わるCMとは
 - ・ 誰に伝えるか(若者、単身赴任、子育てママ等)
 - オ 昼食(90分)
 - カ ロケハン(180分)
 - ・ 映像素材を撮りに出る
 - キ リフレクション(30分)
- 4) 事業手順(第2日、第3日)
 - ア 制作会議
 - ・ 取材方法、取材対象検討
 - イ 映像撮影・インタビュー
 - ウ リフレクション(1時間)
- 5) 事業手順(外部スタッフ)
 - ア 編集・構成
- 6) CM公開(第4日)
 - ア CM公開
 - イ 製品評価

3 自己評価等

1) 街の魅力発見

取材協力者から詳細な地域の魅力、歴史を聞くことができた。

2) 郷土愛を深める

取材協力に応じる生活者の温かい対応に感心した。

取材側の地域への情報不足、理解不足を認識した。

3) 地域の人と交流

インタビュー、撮影のため街を歩きながら、積極的に市民と会話、交流できた。

4) 参加者の学び

観光資源を人として、CM制作を行った。撮影しながら随時CMのイメージを検討、変更した。

参加者の感覚でプログラムの修正も行ったことは、参加者と主催者、指導者の枠組みを緩やかにし、学びの双方向性がみられた。

5) 地域貢献(観光貢献等)

CMは一部完成したが公開に至らなかったが、地域のイベントでの公開が決まった。

地域で街づくりに取り組む人がツイッターに書き込んだり、口コミで参加者が増えたり、今後一緒に活動していこうというつながりが生まれた。

100人CMプロジェクトが立ち上がった。

4 反省点・課題等

1) 参加者を一般募集したが、集まりが悪い。

観光CMの制作への動機付けが不足したため、参加人数が少なかった。

今後、募集対象、制作条件を再検討する。

2) 取材協力者へのインタビュー

後日、取材協力者へ意見聴取した。老舗菓子店店主、鞆屋会長共に高齢者であるが、インタビュー方法、取材意図が良く分からないとの指摘を受けた。

このような事業があることは、大いに好感を持ち支援の約束を得たことは、異世代交流プログラムに手ごたえを感じた。

3) CM制作のルール

CMの制作にある程度の条件、ルールが必要と感じた。

公募のグループでは、参加者間のイメージの共有が短時間では難しく、編集作業での対立もみられた。

キャリアの差があるグループにおいて技術力の差が作品に大きく影響するため、支援者のサポートを得ても参加者の満足度に差が出てしまう。

実践5 ラジオドラマをつくろう

1 目標

普段は視覚の陰にある音に注目することで、街に対する視点を変える。同じ音を聞いて違うイメージを持つ人もいるし、どこに注意を向けて聞くかで受け取る情報も変わる。そんな他者との違いを楽しみながら、いつもと違う水戸との出会いを試みる。

また、音の制約のもとにドラマのストーリーを初めて出会った数人が作ることで、短時間での深いコミュニケーションを目指す。

- きちんと聴く
- 自分のなかのまちのイメージを確認する

2 事業概要

- 1) 募集方法 チラシ 5,000枚(市内公共施設、茨城大学、市民講座等)
- 2) 事業日等

No.	開催日	場 所	参加人数
2	12月11日(土)晴れ	茨城大学三の丸講座室	2人
3	12月19日(日)晴れ	茨城放送スタジオ	2人

- 3) 事業手順(第1日)

ア 準備 ボイスレコーダー、マイク

イ オリエンテーション(10分)

- ・ 自己紹介
- ・ 機材の説明

ウ 水戸の音試聴(10分)

何が聞こえるか?

どこの音だと思うか?

オ 音の向こうにある物語を考える

宿題：音の場所に立ってみる、効果音、音楽を探す、物語の表現方法を考えてくる。

- 4) 事業手順(第2日)

ア 音源の編集、ナレーション、音入れ

イ リフレクション(1時間)

- 5) 事業手順(外部スタッフ)

3月初旬に茨城放送にて放送およびメンバー生出演。

3 自己評価等

- 1) 街の魅力発見

全国でも稀な市街地放送が残っていること、人々の話声、店舗から漏れ聞こえる音楽、街の活

気を感じる事ができた。

また、水戸には駅近くでも静かな場所もあり、街の多様な顔を感じる事ができた。

2) 郷土愛を深める

音から郷土の特性にまで深めることが難しい。盲の人のボランティアをお願いするなど、音だけで地域を感じる事ができる入口への工夫が必要。

3) 地域の人と交流

参加者と講師の作業でワークショップがすすんでいるため、地域との交流が少ない。しかし、実際に電波にのることで多くの人とつながる可能性がある。

4) 参加者の学び

私たちがいかに実際にあるものに気付かずに暮らしているかの気づきがあった。自分の感覚で選択的に聞いている情報が他者と違うことも実感できたように思う。同じような経験から得るものが一人ひとり違うこと、それを共有しながら暮らしていくことの大切さを学ぶことになった。

5) 地域貢献(観光貢献等)

現在までには、FMぱるるんでの一部広報以外に放送されていないため、認知度が低く、実績としては上がっていないが、水戸在住のアーティストが編集した水戸の音と全盲の女性の写真展示が市内で展開されていることもあり、街づくりに取り組んでいる団体とつながって、新たなプログラムの開発が始まっている。

4 反省点・課題等

1) 参加者を一般募集したが、集まりが悪い。

公民館や街づくりの講座などを通してチラシを配布し、公募したが、応募者は2名だった。

2) プログラムの伝え方

ラジオを制作しているメンバーにも参加の働きかけを行ったが、「ラジオドラマ」という募集をしたことで、従来の固定的なイメージから離れず、本来目的としていた、普段、視覚の影にかくれて注目されていない町の音から、町に対する視点の転換を図ろうとする目的への理解を促すことが難しかった。

3回の打ち合わせを経て、なお、プログラムのイメージがスタッフに十分に伝わらない中での実施となった。このプログラムの発想がアーティストからの情報によるものであったため、現状の認識との間を埋めるための他のアプローチを考える必要があったかもしれない。

視覚から切り離された「街の音」を聴くだけで、様々な発見があった。それを体験してもらうことを可能にするものは何か、今後も考え続けていきたいと思っている。

3) 新たな課題への取り組み

実際の制作にかかわって、水戸の音とは何かを話し合う中で、全国で最後になった市街地放送存在や、様々な水戸の音に気付くのだが、参加型の学びはやってみなければわからない。プログラムの是非よりも、認識のないものを伝えていくことの困難さが明確になった。

今回体験したのはわずかな人ではあったが、そのメンバーが今後も交流し、考え続けていくことが、必要だろう。

実践6 観光プランをつくろう

1 目標

今回の事業の参加者を集めて、水戸の街を売り出す観光プランを考えるワークショップを開催し、改めて自分の暮らす街の魅力を確認するとともに、参加者間の交流を深める。

- まちを考える仲間と出会う
- 観光を学ぶ

2 事業概要

- 1) 募集方法 ワークショップ参加者へ案内、茨城大学の社会教育を学ぶ学生に案内
- 2) 事業日等

No.	開催日	場 所	参加人数
1	12月16日(木)晴れ	茨城大学	32人

- 3) 事業手順

- ア 準備 ネーム、模造紙、マーカー、地図
- イ オリエンテーション (10分)
 - ・ 自己紹介
 - ・ 作業の説明
 - ・ グループिंग
- ウ 観光とは何か (20分)
 - ・ 水戸の強み、茨城の魅力
 - ・ 日常と非日常
- オ どう水戸を売り出すか?
 - ・ 観光プランをまとめる

3 自己評価等

- 1) 街の魅力発見

いつも当たり前にあるものの価値が、視点を変えて見直すことで明らかになった。茨城大学の学生には県外出身者も多く、水戸、茨城に暮らす私たちが改めて見つめることのない特徴的な産業や魅力的な人を再発見することができた。

- 2) 郷土愛を深める

生活体験を観光プランにしたグループでは、そのプランに協力してくれそうな人の顔が浮かぶ、といった発言もあった。また、作ったプランを実際に実行してみたいという希望も聞かれており、参加者それぞれが水戸やいばらきの良さを感じるとともに、自分が生まれ育った街を振り返り、その良さも語る場となった。

3) 地域の人と交流

今回は、大学の中でプランニングだけの活動であったため、直接、地域の人との交流は持てなかった。しかし、1ヶ月後のヒアリングでは実際に地域の人にプランの話をした参加者もみられた。

4) 参加者の学び

1ヶ月後の参加者たちの声には、視点が変わった、その後に新たな発見があった、などの声が聞かれた。この活動に参加することで、参加者相互の学びが生まれ、多様な視点を獲得することのおもしろさが伝わったのではないだろうか。

5) 地域貢献(観光貢献等)

今はただ、参加者が思い思いのプランを作成してみたに過ぎない。それが実際に実現されることになれば、地域貢献できると思われる。実施したいという希望も聞かれているので、その支援が必要だろう。

4 反省点・課題等

1) 参加者

各ワークショップの参加者を集めることは日程調整が難しい。そのためもあって茨城大学での実施となったが、他県出身の学生の視点が地域の良さを掘り起こしてくれた。ただ、実際にワークショップを体験している者とそうでない者とは、理解の方法が変わってくる。その差をどのように扱うかに工夫が必要である。

2) 資料

作業用の資料が不足である。地図や文具以外に、茨城や水戸の歴史的な資料、基本的統計など、実体験と知識をつなぐための仕掛けが必要だと感じた。また、インターネットなど情報へのアクセスが可能な環境がある方がより学びにつながったのではないだろうか。

3) ワークショップの時間

今回は1時間半のプログラムで実施したが、時間が足りない。もっと他のグループと交流したかった、他の人たちのプランをしっかりと聞いたかった、出来ればどれかを選んで実際に実施してみたかった、という意見があった。

4) 個人の行動変化への働きかけ

時間的な余裕のなさから、個人の行動計画までを丁寧に作ることができなかった。出来上がった観光プランで個人が果たす役割の確認やこれまでの活動で得たものをどう生かすかの共有など、もっと直接的な働きかけを行うことが効果的ではないか。

アンケートには、いずれかのプランを選んで、実際に実行してみたい、という記述や、他のグループのプランを知りたい、など、グループ間の共有についての記述がみられ、参加者のかかわりの不足が指摘されている。

Ⅱ スタッフリフレクション

1 スタッフとして参加して感じたこと

一緒に動くスタッフがいることのありがたさ。

手探り、見えない。

子どもの発想のすごさ、パワー。

「場」のおもしろさ。

地域の人々の温かさ。

2 何を学んだか

予定通りにはいかないこと。

準備に時間をかけることの意味。

スタッフが共有することの大事さ。

参加そのものが学びだということ。

カール・ワイクが言ったらしい「組織が戦略を定式化するのは、それを実施した後であって、前ではない。人は何かをやってみてはじめて、それを振り返ることができ、自分がやったことを戦略と結論するのである」の実感。やってみないとわからない。

3 この事業が達成したことは何か

居心地のいい場所をつくることができた。

出会いがあった。

自由度の高さを維持し、参加者が主体的に参画できた。

おもしろさ。宝探し。

地域を見つめ直す時間をつくれた。

参加者が次の活動をつくった。

「またやりたい！」という気持ち。



*子どもと一緒に知らない家の庭に入り込んだ。子どもとマップづくりをしたからできたワクワクする体験。

Ⅲ ワークショップ実践のまとめ

1 募集と参加

広報は、チラシ（開催地付近の小学校、市民センターなどを中心として配布）、HPを中心に行い、NPO法人水戸こどもの劇場の会員MLへの呼びかけも行ったが、参加者は毎回募集に満たなかった。マップの最終回では直前に学校からの再配布を試み、CMやラジオドラマは関連分野の講座でも配布したが、参加者は増えなかった。実行委員会の中では、当初より、このチラシでは参加者が見込めない、という意見もあり、参加者を集めるためには、①もっと具体的なプログラムを示すこと、②成果目標を明確にし、③参加した個人にとってどのような利益があるのかを謳うこと、ということが幾度も語られた。しかし、今回、目指した学びは、教える誰かが学習者に対して一方的に情報やスキルを伝える、教える、という性質のものではない。大きな枠組みだけを示し、迷いながらの実践の中で、出会う疑問や違和感に対して個人がその人なりに理解し考えて、それを共有しながら、次の実践を変えていこうとする試みであったため、そのいずれの提案も受入れることができなかった結果でもある。また、実践を担当した水戸こどもの劇場のメンバーからも、「子どもと何かをやるということには興味があったので、スタッフとして参加したが、最初は、このプログラムに興味を持てなかった。でも、実際にかかわってみたら、自分自身もたくさんの発見があって楽しめたし、子どもたちの反応やかかわりを見ても有意義なプログラムだと思った」「できれば継続して、取り組みたい」「もう一度やってみたい」といった発言も多く、やってみなければわからない体験からの学びを伝え参加者を募ることの難しさを実感することとなった。

一方、水戸市好文カレッジと放課後子ども教室の協力を得て実施した手紙のワークは、既存の集団にプログラムを持ち込んだため、集客の問題はなかった。また、生涯学習や社会教育に日常的関心を示し、多様な学びの場に参加する一定層の人々とは異なる家庭環境の子どもたちとも出会うことができた。

2 現代的課題と学び

作業を通して、参加者の地域社会への認識を本音のところで確認できたことは一つの成果である。例えば手紙のワークでは、子どもたちにとっての地域が、学校と家庭に限定されており、子どもを取り巻くそれ以外の大人の存在があまり意識されていないこと、地域にいる知らない大人を意識し想像してもらおうと、それは「怖い人」であり、「危険」だという認識が大きいことが作業中の会話から覗えた。シンポジウム終了後に話した大学生が「この事業を自分が子どものころに実施してほしかった。子どもの頃から、知らない人は怖い人、と言われていたので、学校に通っている間、ずっと怖い思いをしていた」と語ったことから、感覚的に捉えていた地域課題を、事業を通して確認することとなった。

CMづくりの協力者へのヒアリングでは「ビデオカメラやデジタルカメラを持って行う調べ学習であれば、小学生でも事前に何を調べるかを決めて、下調べをしてから来る。そうした方が、もっと深いところの話ができる」というような意見があり、シンポジウムでも「水戸の何も知らないで…」という指摘も受けた。しかし、今回の企画が目指したものは、調べ学習でも、歴史を知ること

でもない。知りたいという欲求が現れるような刺激、歴史への好奇心が発現する機会を探すことであり、答えではなく問いを探す活動である。そして、その問いに向き合う中で次の問いに出会えるような、学び続ける仕掛けを模索することだった。学びのイメージ、学習の在り方に関する認識の違いについても、実感を持って理解することになった。

各ワークショップとも、参加者にはさまざまな工夫が見られた。参加者の気付き、意見を取り入れながら、マップ作りでは、人物を一枚撮ることを、手紙では、身近な人から始めて地域に広げていくプロセスを追加し、CMづくりでは、モノからヒトへと対象を変えて、個人の物語から街を見つめ、土地の歴史に触れた。それは、学びのプロセスに参加者が深くかかわり、ともに学びを作り上げていくことにつながった。今、学びの転換点に立って、求められている主体的な学びへの一歩である。

3 街づくりと社会教育

参加の課題は、OECDの『世界の生涯学習』（2010）の冒頭にも取り上げられており、どこでも同じように、成人学習への参加には大きな不平等がみられ、高等教育卒業者の参加率は低スキル成人の5－10倍も高い。そして、参加者の数が評価に直結する現在の生涯学習の現状を鑑みると、既に生涯学習や社会教育に参加している高学歴、高スキルの一部の層のニーズに応えるしかなくなっており、さらに社会教育への感心は限定される。しかし、今回の学童クラブや放課後子ども教室、大学での取り組みは、多様な人たちの参加と、潜在的ニーズへのアプローチを可能にする手段となるのではないだろうか。広瀬（2009 日本社会教育学会）が主張しているように、社会教育と学校教育は不可分の関係にある。今回の実践は、シンポジウムや関係者のヒアリングでも「学校の調べ学習に似ている」「学校でやったらおもしろいのではないか」という発言があったが、それならば市民が学校支援のボランティアとして、今回の社会教育プログラムを学校に持ち込み、社会科学習や総合的学習へ参加していくことも考えられるだろう。また、学校教育との連携によって、地域理解のために、PTAや商店会、自治会、企業などの研修と社会教育が連携して、主体的参加を促す今回のようなプロセス重視のプログラムを提供することができれば、子どもたちの学習意欲を向上させることにつながっていく可能性は大きい。

また、今回、街中で行ったヒアリングでも実感することになったが、街の人々は、十分に語ることを持っており、語る場を求めている。老舗の和菓子屋に代々伝わっている和菓子屋の視点から語り継がれた街の歴史、古くからの鍛冶屋が持っている技の伝承、街の中にある知識や知恵に焦点をあてて、それらに価値をつけていくことは、語り手としての街を活性化することにもなる。これらは街づくりの中では参画型デザインングとも呼ばれ、蓮見（2009）によると一定の成果が確認されているが、社会教育による活動が各地で展開されることになれば、それらを学校教育と結びつけ、多様な人々に広げていくことができるのではないだろうか。

このような学びは、時間も手間もかかるが、活動の中から地域課題への共通認識をつくり、その解決を考え、浮かび上がる問いを探求しつつ活動を創出していくことが、主体性のある個人を育て、シチズンシップを育み、新しい公共の基盤となる参画を実現させるのではないだろうか。

現代的課題を取り扱おうとすれば、自ずと結果や答えは見えにくい。今回の活動を通して現れた「子どもの安心、安全を取り巻く課題」にも一つの答えがあるわけではないだろう。もしかしたら、

答えがないかもしれない、あるいはいくつもの答えのある課題に取り組むことは、生きていれば当たり前のことなのに、「答えは一つではない」ということから丁寧に始めることが必要になっている。この価値観を育てているものの一つは、効率を優先し、一つの答えを目指すことを強制してきた預金型教育とも言える。また、学校教育や一部の生涯学習の中で目指されてきた共感と協調による一致団結は、協調圧力を強め、排除の構造とともに違和感や疑問など個人的な感覚を封じ込めてきた。それらと子ども期の生育環境の変化による子どもの遊ぶ体験の不足、子どもの自治を可能にしていた子ども集団の崩壊が相まって、思考停止の社会をかたちづくっており、それは、無気力、無関心につながっている。それならば、まず、個人の感覚に最大限注目していこう。また、何かを教えることよりも経験からの小さな気づきによって、疑問、問いを探ることから始めよう。お互いの違いを大切に、違いから学ぼう。さらに参加者が緩やかにつながり、お互いを尊重しながら、学び続けることの可能性を探ろう。そしてそれが観光という視点で地域につながる時、地域に内在する文化や歴史、さまざまな資源に新たな価値をつくっていくのではないだろうかという仮説によって実践された今回の企画の結果は、それらの仮説の正しさを証明している。これらの体験から、渡邊（2010）のいう観光教育や観光のまなざしが、新たな「共有知」を生み出していくこと、地域の人々のアイデンティティの再構成、再構築は、住民を主体として始まる。決して歴史教育や伝統文化の継承が先にあるのではない。

しかし、地域人材の育成というテーマにおいて、今回の実践は、その入り口に立ったに過ぎない。様々な視点から今あるものを見直すこと、考え始める事、に向き合う小さなつながりが芽生えただけで、それをどう社会に発信して、広げていくかまでには到底行きついていない。また、このようにプロセスを重視し、誰もがいつでもリーダーシップを発揮できる集団を育成することの意味はまだまだ地域の認識として定着しているわけではない。

今後は、今回の実践から見えてきた地域課題を中心に据えながら、様々な場で発展形のプログラムを実践し、丁寧なリフレクションを繰り返しつつ、これからの地域リーダー像、他者への発信のあり方も含めて、スタッフや参加者と共に考え、研究を継続していくことが必要だろう。

（文責：横須賀）

シンポジウム



あいさつ

大学と地域社会間のパイプ役を目指して

今日は、文部科学省委託事業「社会教育による地域の教育力プロジェクト」に係るシンポジウム「生涯学習と街づくり」にお招きいただきありがとうございます。

茨城大学生涯学習教育研究センターは、大学と地域社会間のパイプ役として、大学の壁を少しでも低くしようといくつかの試みを行っています。そのひとつとして、学生向けの正規の授業を地域の皆様に開放し、学生と共に同じ教室で学んでもらう公開授業を実施しています。3年前から本格的に取り組み、開講数も受講生数も徐々に増加しております。社会人の方には、若い頃の自分を思い出すきっかけになり、学生には、真剣に学ぶ姿は、よい刺激になります。

ただ、大学は「知」の提供だけではなく、「動」（動くという意味です）も伴った「知動」両方を兼ね備えなければ、地域社会から信頼されるようにならないのではと感じております。研究や教育を通じて取得した「知」を実際に地域社会のために役立て、より磨きをかけていくことが重要だと考えています。

そういう意味で、今日は、「動き方」のヒントが得られるのではないかと期待して参りました。

大学は、「知」の宝庫です。是非、身近な「知恵袋」として利用して頂きたいと思います。

茨城大学生涯学習教育研究センター
センター長 仙波 一郎

シンポジウム

コーディネーター 長谷川 幸介（茨城大学）

シンポジスト 渡辺 タケシ（ワークショップデザイナー）

安 和人（こどもの劇場理事・ワークショップデザイナー）

横須賀 聡子（ひと・まちねっとわーく・こどもの劇場副代表）

谷山 由利香（文部科学省）

（長谷川）

「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」について、いろいろな地域の力を借りて、その地域の持っている力を使い、どうやってそれを改めて外に発信したり、内側の自分を見つめ直したりする教育力をどのように強めたらいいかの各種の先行的なパイロット的なプロジェクトを文科省が募りました。その中で6つのプログラムを出して、その結果を発表することになりました。この6つのプログラムは、全体としてはモザイク模様になっています。一つ一つのモザイク模様で作られたパッチワークの一つ一つのパッチの所から話し合います。一番目は、観光プランづくりについて話し合います。

（渡辺）

日頃意識しない所によさがありました。実行しなくては意味がないとか、人の顔が浮かんだというのはすごくいいなと思います。横須賀さんが、全体的な観光資源を活かすのではなくて、個人個人がいいと思う所を活かしていかないといけないというようなことをおっしゃっていました。水戸市にずっと住んでいて水戸市のよさがわかる人と、水戸市に新しく来てよさが分かっている人だったら、いい所は違うと思います。街づくりを行っていく時にその両方のいい所をすり合わせて、「水戸市」を新しくイメージとして創り上げていかないといけないとを感じるので、このような観光プランづくりはいいと思います。

（横須賀）

茨城大学の学生は県外の人も多いです。その人たちが、こんな所があったのかという反応がありました。これはどうなっているのというやり取りが起きたことは、もう一度暮らしている街を見直すことになったと思います。いつものメンバーで話しているだけではなく、外からの目が入ることは重要だと感じた時間でした。それは、CMづくりやラジオドラマの音源を録っていた時も同様です。私たちが当たり前で聞こえているもので、水戸市で流れている「ハーイセンス、ハイライフ」という宣伝が流れていると思います。このような放送は、全国的にどこも成立しなくて、唯一水戸市だけが残っています。私たちが知らない自分たちの街の特殊性と個性、そのことに気づくのに外の人たちの、えっ、なんでこんなのがあるの、という視点を伝えてくれたりするは、とても大事だと思いました。

（長谷川）

外側から入ってくる異なった視点や視覚が、枠組みを持った人たちが見る目線と、中に住んでいて日常的にここで暮らしている人たちの目線のズレだとか違い、その中に実は新しい発見があり、そのことを仕組んだということですね。

(谷山)

観光資源として最終的には活用していくということで聞いております。CMづくりもラジオドラマづくりもそうだと思うのですが、地域の内側にいる人にしか分からない地域のよさがあると思っています。それを再発見することを第一段階として、それを観光プランに活かしていくというのが、この事業の内容だと思います。その観光プランづくりを作る所までは取り組みとしてされたのだと思いますが、それを外に発信していく方法や最終的な着地点があまり見えてこないと思います。そこを、明確に表せると他の地域もこういうことをすれば、こうなるのかという可能性を見出せるのではないかなと思います。

(安)

目的は発信までだと思いますが、私たちはその中でプロセスでの学び、やったことの学びというものが、新しい視点になるのではないかという所に、社会教育、生涯学習の価値を考えました。プロセスの中での学びというものが、たくさんあるのではないか。内にある当たり前の資源を気づかないでいるのだけでも、そのことをどのように発見するのかという方法論やノウハウを築くことがこのプログラムの価値でもあると思います。

(長谷川)

これを作っていく過程が発見であり、学びだということですね。そこに、今回のプロジェクトのねらいがあるということですね。谷山さんから、このプロセスの中で生み出されたものをきちんと整理することによって、新しいプロセスに展開できる、全国で同じ事を考えている人たちに伝えられる、そういう新しいプロセスまでいかないと、本当のプロセスではないのではないかという指摘でした。個人的な観光プランが立てられました。これをどうやって使うといいかということと、私は常陸太田市の山間で、ワークショップを行っています。そこに行く人がいない所で、交流人口という言葉がよくでます。多くの観光客を呼び込んで、人口が2,000人しかいないのに観光客が3,000人来たら、交流人口は5,000人となると話をしています。今、私たちが考えるのは新しい考え方で、活動人口という言葉を考えています。一人の人間が、5通りの活動をしてたら5人分となります。だから、定住人口2,000人でも、それが一人の人が5通りの活動をしていたら、全部で1万人の活動人口なると話します。そのことをもう一回私たちは発見しなければ、過疎化に戦いきれないだろうということで、社会教育の課題として、自分たちを見つけるっていうのは交流人口ではなく、活動人口だと思います。自分たちがどうしていくかという方に、力を入れ始めています。観光というテーマを交流人口だけではなく、活動人口の枠まで広げてもらえないかという思いを私は出しますから、それに対する検討をしてもらいたいです。会場の皆さんのほうから、質問とかございましたら。

(会場A)

ここまで観光プランづくりを作るのであれば、机上の空論で終わらせることなく実行することを目標に考えるといいと思います。バスのチャーター料とか移動距離時間で50キロだけど時間は3時間とか、本当に地に着いた考え方に基づいていろんなところに深くなることで、知識も必要となり、

目的を持って行くと自立的に学べて、それがきちんと身につくと思います。上手くいけば、どこかの旅行会社に売り込みに行って、そのプランを買ってもらうというような目標まで立てると非常に楽しいのではないかと思います。

(会場一B)

水戸市では「さきがけ塾」というのがあります。長谷川先生に「何だか嬉しい」という講座をもってくださいました。受講生一人一人に「何だか嬉しい」と感じる水戸市の風景を、画像と言葉で作ってもらいました。比較的偏りが見られて、自分の街を新しい目で見れていないと思いました。日常の目というか、普段生活している目線でしか物事を見れていないという感じを受けました。外から来た人の見る目の方が、新鮮な新しい驚きをもって見てくれると感じます。水戸市を知っている中にいる人間がもっと目線を変えると、新しい観光資源がたくさん出てくるのではないかと感じさせられました。

(長谷川)

つまり日常に暮らしていると、何か見えなくなるんだよね。見えているんだけど、見えないことがあるということですね。

(渡辺)

手紙ワークショップに係りました。外側の人の方が、地元の人よりも新鮮な目を持っているかも知れませんが、イベント者ではないので楽しませるのではなくて、一緒に楽しんでます。それで、楽しんでいくうちに視点が変わっていくことを目指しています。長谷川先生の楽しさの感染力はすごいなと思います。長谷川先生が話すときみなさん笑いますよね。このようなことをワークショップで行い、手紙ワークショップでもそうなのですが、子どもが変わり、また子どものお父さんやお母さんが変わり、地域の人が変わっていきけるような活動になれるといいと思います。今回もそうなっていればいいと思いますし、これからも係らせていただきたいです。

(長谷川)

今は、プロセスの話ですね。安さんと同じですね。こういうものを作るときに、そのプロセスという点で、日常の暮らしがプロセスだと思います。そこで暮らすというのは、プロセスです。でも、安さんがさっきから言っているプロセスというのは、何かを発見をして分かち合うプロセスってことを意味しています。ところが、私たちが日常の暮らしでおそらく分かち合っていると思います。家族で分かち合う、友達同士で分かち合う。でもそこにいると、その事に気がつかなくなっているのではないのでしょうか。それが、日常です。それをプロセスというのなら、日常のプロセスをハッと気づかせるのがポイントだと思います。

(横須賀)

本当に、日常をどう発見して直していくかという事はすごく大きいと感じます。観光資源を活用した街の活性化ということも目標に書いてありますが、目指したいと思っていたのは、郷土愛のようなところなんです。自分が住んでいるところにこだわりを持つとか、愛着をもつとか、大事に思えるというようなことは、どこから発生するのだろうかと考えていました。それは、いつも当たり前前に流して生活している日常をもう一度再発見するというところにあるのではないかと考えてきました。それで、日常を観光という視点で見たらどうなるのだろうかというのが、この企画を立てるおもとにありました。日常は観光にならないと思うかもしれませんが、私が旅行に行くとき

の選び方として、その土地に誰かがいるとか、繋がりがあるとかが大事な要素で、その土地の日常を感じる所に行くことが好きなんです。そこに暮らしてみるような観光を考えていました。いろいろな観光の売り方がありますが、日常を観光資源にしていくことはどうなのだろうかと、100人にインタビューを録って、100の水戸自慢を並べたいというふうになってきています。長崎県の小島ですが、民泊を観光資源にしている島がもうすでにあり、この企画を書いたときにはまだ知らなかったの、「うわっ、あるじゃんもう。」って少し愕然としました。

(長谷川)

茨城県でも、もう民泊を観光資源にしてるところはあります。ひたちなか市とか、常陸大宮市で行っています。仙波先生がおっしゃったことを、整理して精度を高くしていかしてみます。例えば、水戸駅前に10種類程度の観光マップづくりを出して、皆さんどのプランに行きたいかと押してもらってはどうか。その中でナンバー3くらいを商品として企画化したら面白いと思いませんか。そのように弾みながらやってみてもいいですよ。結局それが成功しようが失敗しようが、皆さんが言ったように、そのプロセスが自分たちを再発見するっていうか、自分と自分たちを再発見するプロセスになっていけばいいっていうものを作るといいと思います。

(谷山)

そのプロセスの開発が目的なのであれば、きちんと整理してそのプロセスがこの事業に関わっていない人にも伝わるようにしていただければと思います。今のバラバラの説明をお聞きしているだけですと、なかなかイメージがつかめなかったの、そのプロセスを整理してまとめていただきたいと思います。

(長谷川)

手紙ワークショップについて話し合います。

(渡辺)

一つ大きく感じたのは、私は主催者ではなくてアシスタントなのです。女性の美術家がいる、その人の考案でこのプランが行なわれ、横須賀さんというNPOの人がいるというのを客観的に見ながらアシストしているような感じでした。先ほど、アーティストの人にこういう街づくりに係わってもらうことの可能性みたいなものを話されていましたが、アーティストはアーティストで楽しいから行っているのだと思います。面白いから行く。でも、NPOのほうは何のためにという目的がある。そのくい違いが先ほど言っていた、コミュニケーションが難しかった部分だと思えます。そのコミュニケーションは難しくてもいいと思うし、この事業のモザイクがある意味で何のためにというのもあるかもしれませんが、面白いから行っている部分ってすごく強いと思います。その面白いから行っている部分が身になって、誰かが使ってくれるっていうサイクルってすごくいいと思います。そういう意味で面白いアーティストを見つけてきて、横須賀さんが水戸市のためにどういうふうにしていくかというのを、悩みながら行っている構造は客観的に見ていいなと思いました。

(安)

仕掛ける側、参加する側にも個々に想いがあるという前提で、それをどうすり合わせるのか、場として楽しさがつくれば、そこから作品等が生まれることがあるのではないかと個人的には思っています。だからその進行の仕方で、「楽しさ」が重要なのだと思います。今回のアーティスト

さんの帽子とカバンというツールがあります。そういうもののアイデアというのは非常に我々では出てこないものです。そういうものがあって作ることが活性化したというのは事実なので、アーティストや外部の方といっしょにやることは可能性を感じます。

(横須賀)

アーティストが、何か作品としてやりたいという気持ちも分かります。私がやりたいことは、子どもたちが、自分が社会に係われる、自分たちが社会と繋がっているという意識をつくるということでした。多少ズレる所があり、それをどこまで自分の中で許容できるか、子どもにとってどうなのかとか、そういう中ですごく悩んだ事業でした。

(長谷川)

私もこれ一番学べました。社会教育では、今の若者とかは私たちの世代に比べて、人と係わらないように思います。係わらない方が、重要視されているのです。社会教育では、係わる力は社会力と言っていますが、人間と人間が係わっていく力が大事だったのに、今は係わらない力を養成されているのではないのでしょうか。知らない人は怖い人って教えられるということは、係わらないことを教えられることだと思います。それに対して、知らない人に係わっていけるということは、すごく社会教育的だと思っています。それで、ここで初めてアーティストと一致できます。

(会場—C)

素晴らしい取り組みだと聞いていました。以前、私は小さい地域でやったことがありました。もう少し、身近な所からスタートできたらもっとつながりが広がったのではないかというのが感想です。

(長谷川)

身近な所から始めない所に意味があるのですよね。

(横須賀)

はい。顔も知らない人とも繋がっている感じ、みたいなもの、基本的に誰とでも繋がれるというものを子どもたちに伝えたいと思いました。すごく近い所で行っていたら、顔の見えるつながりになると思います。例えば、学校の学区内で考えると、駐在さんやスーパーの人等に手紙を書こうという顔の見える関係ができると思います。それはそれで素敵なことで、どこかでやっていったらいいとすごく思います。手紙が、どう伝わったかという評価は、今は難しいですが、経験として、なんだか知らない人に手紙を書いたら返事が返って来たということがあったら素敵だなと思いました。帰ってきた手紙は、個人ではなくて場に返そうと思っています。

(谷山)

知らない人イコール怖いという子どもがいたというのは、やっぱりショックな話しです。地域全体で子どもたちを育てていこうという取り組みを文部科学省で推奨している所です。自分が知っている人以外は怖いなんだとイメージを子どもたちが持ってしまっているのは悲しいことだと思いますし、そのようなイメージを払拭することにもこのワークショップというのは効果があると感じました。

(会場—D)

本当にいい企画だなと思いました。この企画がなかったらこの子どもたちはこのことを知らずに、知らない人は怖いというイメージのまま成長をしていくと思います。この企画に携わった子どもたちは、人生の中で何かのきっかけをつかめたのではないかと思います。その意味では0の所から、

子どもが変わるきっかけを与えられたというのは、その子たちに 10 点満点をあげていいのではないかと思います。

(長谷川)

CM制作について話し合います。

(安)

CMというイメージは、テレビコマーシャルからみるので短い時間で的確に物を伝えるということになります。最初に、誰に何を伝えるかという部分で掘り下げて制作を行いました。地域資源は、たくさんあります。外に発信する場合に何を選ぶか、人のよさをどのように伝えていくのかとすることがあげられました。そのプロセスの中で、見せ方について議論をしました。その議論を振り返る中で、作品に落とし込むまでの部分ができていないのが反省点です。その視点が外部視点であったり、自分たちで作りたいという自発性が生まれたりする雰囲気になった時点で成功ではないかとしました。それが、100 人インタビューへと発展しました。出来た時点で成功となると改めて感じました。

(長谷川)

このプロジェクト全体を通じて言えるのは、なにか人との違いみたいのを発見しながら、違いを分かち合うみたいな思いがありますが、点数のつけ方、シナリオもそうですが結局自分を表現する。だから、自分勝手とか自分の思いだろと言われるくらいのもが出たということに意味があるのです。本当は、CM制作だって元々絵コンテみたいにそのシナリオを作ってそれに合わせて回していくのです。全然なくてぱっぱぱつと撮っていた中で、それを組み合わせて作業の中に自己表現がでてくるのです。自分が、違った出方で分かち合えるようになったらいいと思います。

(横須賀)

1 回の撮影の時間とその振り返りが、長くなってしまいました。短くしていますが、話してくれる方は時間をきにせず話してくださり、1 時間・2 時間回しているような感じでした。そうするとなんでこうなってしまったのかと、メンバーで 30 分くらい振り返りをするのです。声のかけ方がまずかったのではないかと等話し合いを重ねていくことが、学びとなっていました。まちの人たちが、語りたいということが生まれてきたということは素晴らしいことだと思います。最初は風景を撮り、水戸市の紹介CMになるだろうと予測を立てていました。けれども、撮っている人たちがいろんなものを見つけて、人に集約していきましたが人へのプロセスの中でも、どういうアプローチでどんなことを聞いたらいいのだろうかということをお話していました。

(長谷川)

これは時間がかかると言っていましたが、全国に発信できますか。

(横須賀)

発信できます。これを短時間で、こういう風にしたらできますよというパッケージにした瞬間に色あせる気がするのです。こういう仕掛けがありますよ、こういうアプローチがありますよという風に出して、その土地その土地で関わった人たちが作っていくことが、一番その土地を知ることになるとなります。そして、地域を盛り上げていこうという地域リーダーが生まれることになるのではないかと思います。

(谷山)

モデルを作る中で、次はこうしていったらいいのだという課題が見つかったり、ここはこうした方がいいのではないかと提案をしたりすることが見つかると思います。そこをきちんと、プロセスの中で組み込んで次はこうしてみたらいいのではないかと行って下さればいいモデルになるのではないかと思います。

(渡辺)

これは長くやったら面白くなると思います。私は、東京ふつうの人新聞というブログをやっています。これは、東京に住んでいるだけでなく全国全世界の別に有名でない人のライフインタビューを載せています。3年目ですが、150人くらい載せています。普通の人インタビューがかなり高評価を受けており、今年ライブドアのブログ賞にノミネートされました。こういうものの評価というのが点数ではなくて、どれだけ長くできるかになってくると思います。継続が評価になると思います。

(会場—E)

市民県民に対して、興味や活性化という目的が含まれているのではないかと思います。発表された内容すべてそのようなことを考えて活動されたのではないかと思います。発表を聞いてどれも斬新なものが一つもありませんでした。お面白いじゃないかおれも参加してみるよという思いにここに来た人たちに思わせなくては、点数は付けようがないと思います。学生は、水戸市に4年間しかないの、その4年間にどういふ思いで水戸市に参加しようかと学生にはあると思います。それに期待に応えるべきではないかと感じました。私たち水戸市に住んでいるものたちが、あまりに水戸市を知らないのです。なぜ、城下町で水戸市が栄えたのかということを知っている水戸市民は知らないのではないのでしょうか。なぜ知らないかは、教わっていないからなのです。水戸市にこういうことがあるのだよ。こうすれば面白いのだよということを知っている水戸市の人たちはそういうことを訓練がされていません。そこを知らなければ水戸市民が興味という所まで発展しないと思いました。

(長谷川)

そういう見方もあると思います。今の話しも率直な意見だと思います。それはあまい企画がということ。プロセスというところに重点を置いているので、企画の評価の眼差しが違のかなという感じもしますが、一方で納得いく所もあります。

(横須賀)

実際に、インタビューに伺った所の商店主の方からも、同じようなご指摘を受けています。インタビューに来た人が、もっと水戸市の歴史的な背景を学んでからインタビューに来たらもっと違うものが出るのではないかというご指摘もいただいています。

(会場—F)

ひたちなか市に住んでいます。音楽の街づくりということで発信をしていますが、市民には全く伝わっていない状況です。街づくりにはやさしいまちだとかいろいろな言葉がありますが、どんな風に住んでいる人に伝えていくのかということが難しく感じました。その意味では、観光資源を取り上げているので、分かりやすかったと思いました。どんな観光資源を、どんな風に作っていくのかという取り組みの仕方なども私はすごく興味を持ってました。手紙はおもしろいからやるという言葉がありましたが、おもしろいから参加するというのはすごく大切な要素だと思います。おもしろくならなければ、誰も参加はしないと。おもしろいから参加する講座をどのように作るか、

どんな風に企画をしている方たちが目標値につなげていくかということがすごく大切だと思いました。その意味では、どんな風に何を仕掛けるか、仕掛けという言葉がすごく心に残りました。何をどんな風に仕掛けて、おもしろさをどんな風に作り参加者が満足していけるかだと思います。計画した側も、ある程度の満足を残すためにどうすればいいかを感じました。

(渡辺)

水戸市を知らないでインタビューをするなんてというのがありましたが、これだけの人が集まり、それはおもしろくないというのもいいと思います。その中でも、おもしろさを見つけたり、こうしたらいいのではないかと意見が出たりするといいと思います。

(安)

スタッフでは、本当に地域は社会教育や生涯学習を必要としているのか、個人個人は社会を意識しているのかということができました。この不況で生活がいっぱいだと言われればそうだと思います。しかし、それだけではまずいと思います。そのことにアクセスする機会が本当に少ない。子どもは、他人は怖いものと言っています。ある意味で、大人の価値観でもあるのではないかと思います。そこを体験させるための場として、こういうプログラムがあり、徐々にですが、体験することでおもしろさが広がり価値が変わると思います。自分自身が変わるといふ所を見ていく所がもっと必要なのではないかと思っていて、このような事業があるのだと思いました。私たちは学びながら、一般の人たちにもこれがいいなと思えるようなものに育てていきたいと思っています。そういう思いを広げていきたいと思っています。

(横須賀)

参加者が、社会教育とか何か講座の中で、その講座に対して、こういう風にしたらいいのではないかと言えるプログラムが必要だと思えます。そして参加する中で、参加者に問いが生まれていくことで必要だと思えます。教わっていないから知らない、興味がないから忘れていくということがありますが、みんなが視点を変える、興味を持つということが、どうやったら実現できるのかということを実践の中でも考えてきました。興味を持って、ひとりひとりが問いを立てる。知りたいと思っ、その地に向き合うということが社会教育ではないかという気がしています。それが、地域の中で広がればいいなという希望を持っています。

(長谷川)

今回のプロジェクトのねらいという全体のコラージュというかパッチワークのように張り込められた6つの企画を通して考えていたのは、こういうことだと思います。普段は見過ごしてしまう風景とか人との関わりを立ち止まってみるというワークショップを行ってきたと思います。立ち止まって見たときに見えてくる人とのつながり、周りにある風景だったらそういうものを発見するというのは、実はそういうものがないなあとか思う自分を発見する仕組みになっているのではないかと思えます。その映像とか音を聞きながら、自分を発見してそれを仲間と一緒に分かち合うことによって私たちが発見するっていう二重のプログラムを組まれていると思います。それが楽しさとかおもしろさの中で実現するっていうことを意図している。これを分かりやすく一つのマニュアル的なものにして、全国に発信する作業に向かわなくてはならない段階なのだと思います。

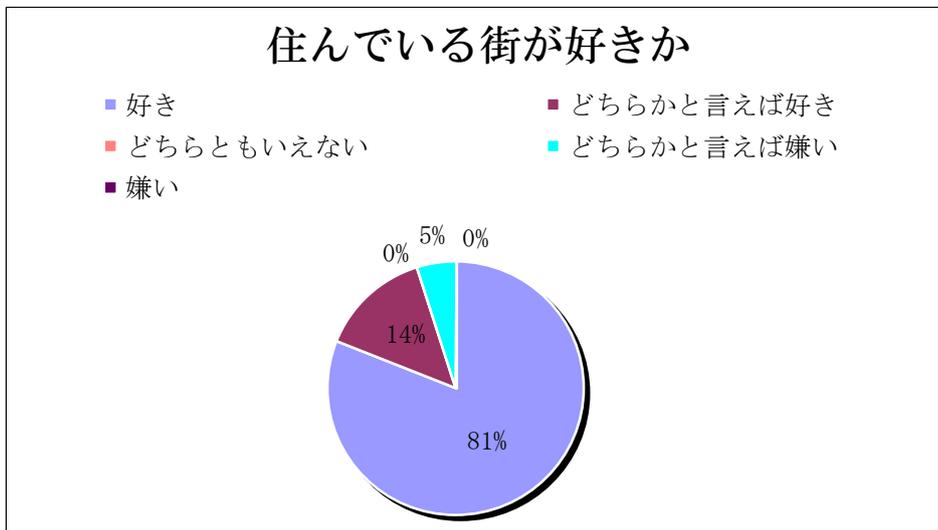
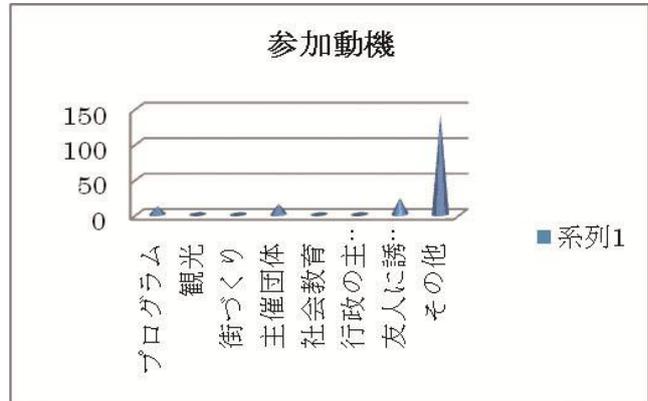
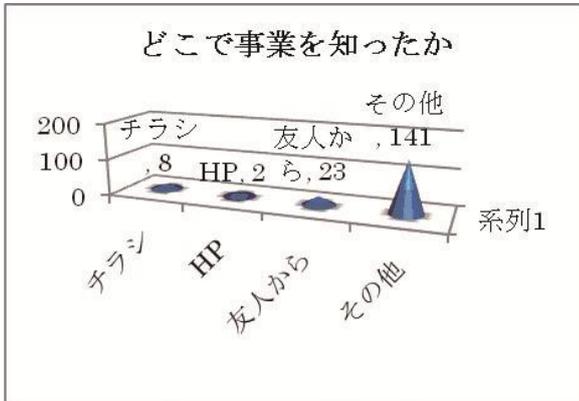
(文責：江幡，黒崎 下線：横須賀)

アンケート

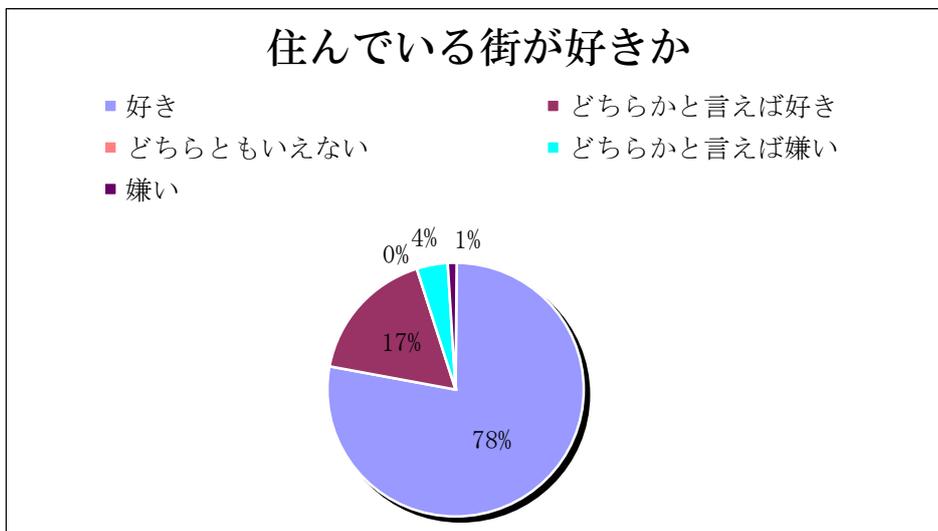


アンケート集計

事前アンケート，ヒアリングから



事後アンケート，ヒアリングから



自慢できるもの

大洗水族館, 好文亭, 小さな美術館が点在している, やっぱり偕楽園 (2), 牛久大仏もおもしろい, 千波湖 (2), レンコン, 海があり山がある, 雰囲気, 広い公園と湖と県庁 (周辺のおだやかなかんじ), 納豆, 偕楽園, 大洗, 芸術館, 京成百貨店, 「~館」の多さ, 水戸の (というより茨城の) 人たちの方言が好きです, “温かい人” とうちのレンコン, おもしろい人, マンホールのデザイン, アートな雰囲気, 何でもあるところ, おいしいもの, 昔ながらのパン屋 (木村屋), 下市のダルマ, 古いお茶やさんがたくさんある, 私はクラブでアルバイトをしています。それに関連して, 水戸には多くのクラブがあります。そこに来たり, 遊びに来る人はとても親しみやすく, もっと水戸のクラブシーンをみんなに知ってもらいたいです。

気付いたこと

子どもの視点と大人の視点の違いに気づいた。

外国の風景に憧れていたが, 水戸の風景にも絵になるところがあると思った。

あらためて見てみると景色が違って見えること。

下市のダルマとか, 顔がみんなちがったり, おもしろいものがあること。

手紙を書くのはおもしろいと思った。

地域にはいろいろな大人がいるということがわかった。

知らない人は怖い, と思ってたけど, 病院の人や給食の人とか僕のために何かしてくれる知らない人がいることがわかった。

水戸, 大洗には自分が知らない場所がまだまだたくさんあることに気付いた。

その土地に住む人がその土地について発信していくことが, その土地を良さを分かり, 魅力を引き出せるのではないかと感じました。

県外, 市外の人に水戸をアピールするのはどんな視点でやったらいいのか, 考えることはなかなか難しかった。

茨城は田舎とか何もないと思いがちだが, 対象別に考えれば魅力的なところがたくさんあると気づきました。

あまり見るところがないと思っていた茨城も実はたくさん良いところがあるのだと知った。

みんなで話し合うと, 色々なアイディアが生まれてきて, よりよくなる。

水戸付近で2日間のプランを立てるのは難しい。2日間を水戸で時間をつぶすのはちょっと無理な気がする。

他の地域に住んでいる人に, 茨城のどんなところをアピールするべきか悩んだ。普段, 茨城に住んでいる人にはあたり前すぎて気づかない部分も, 自慢できる点や面白い点であるのだと気づきました。

こういうことをして, 協力してくれるだろうなって人がたくさん思いついた。やっぱりいいまち玉里村!!!

考えていくと, どんどん話が盛り上がった。また, どの年代か, 性別, 場所をターゲットにするのかも考えて話をすすめていかなければならないので, 考えがいがあった。

考える人によって観光プランが異なることを実感しました。

おもしろいものがいくつかあっても, その周辺になにもないと, 観光プランをつくるのがとても難しい。

観光プランで非日常的なものだけでなく, 日常的なものを入れ込むのはおもしろいなと思った。

観光プランをたてるのはむずかしい。

茨城県は観光資源に乏しいと思った。

茨城でプランをつくるのは難しい。

学んだこと

チェキの使い方。

自分がやりたいこと（意見）があつたら、どんどん言った方がいい

ある土地について多方面から見ることで、新しい視点が生まれてくると思いました。

視点は多く、こまかくないと、人は動かせないということ。

視点を変えてみてみるという姿勢。

新しい茨城の発見。

旅行プランは行きたくなるような魅力の効果的な伝え方はどうすれば良いか。

一般的に観光地、名所とされているところ以外にも、さりげないところ（ただの街並みだったり、風景だったり）も観光になると感じた。

自分のまちで、もっとアピールできる場所があると思った。

自分が参加したいと思うプランを練るのもそうだが、いろいろな立場の人たちの気持ちになって企画しなければならぬのだと思った。

気付いてなかったけど、茨城にはおもしろいものがたくさんあるということ。ただ観光プランは立てづらい。

そして若者向けのスポットがない…

思ったより水戸市内のことを知らないのでも、結局水戸市内から離れたプランになってしまった。

私たちは「旅行」というと非日常的なものを求めていることが多いことを学んだ。

笠間など、今まで気にしなかったスポットに気付けた。

行ってみたいと思わせるような観光プランを組むのは難しいと思った。

感想

マップづくりに参加して子どもが変わりました。

家に帰ってから家族でやってみました。いつもの場所がいつもと違って見えました。

お付き合いで参加しましたが、やってみたら意外とおもしろく、考えさせられることが多くありました。これからも続けてほしいと思います。

子どもの夏休みの宿題にと参加しましたが、実際に歩いてみたら、私も楽しくなりました。

自分の企画しているイベントの中でチェキを使って、人にインタビューすることをやってみたい。

インタビューしていたら、街のことを語りたい人たちがたくさんいることに驚きました。その人個人の歴史まで、たくさんのお話を聞かせていただきました。

とにかく人と出会うことが面白いと思いました。

時間が足りなかった。もっと時間をかけてやってみたい。

みんなの意見を取り入れて観光プランをつくるのは、思ったよりも難しかった。

複数の班で何通りもの観光プランがあり、おもしろかったです。

なかなかおもしろいルートのプランを作れたと思うので、実際に自分でまわってみたい。まだまだ知らない茨城の面白いスポットを知りたいと思った。

同じグループに、実家でれんこんを作っている方がいたので、ずいぶんと話が盛り上がった。れんこんを掘るとするのは茨城県内の観光プランで見たことがないものだったので、やってみたらいいと思う。

楽しい活動になった。

実際にレンコンのツアーに自分自身が参加したい気になった。

時間が短かったので、不十分な気もしましたが、この時間内で話し合っ、意見を出し合い、楽しみながらやることができたと思います。

茨城は車がないとプランを決行するのが難しいなと思った（不便さを痛感）。

特にありません。

プランは楽しく参加できた。もう少し時間をかけて、良いプランは実際に行動してみても面白そうだった。

せっかく複数のグループで作成したから、比較して、どのような旅行プランがあったか見てみたかった。

茨城→水戸→納豆、というイメージ以外の茨城を多くの人にわかってもらいたい。

班のグループ発表が聞きたかったです。

地元人である私からすると普通の景色が、その他の人からは、キラキラして見えるんだと気づくことができました！！

私たちは今回、都会の人を中心としたプランを練ったが、もっとたくさん考えられたら楽しいと思った。

手紙を配布する中で

何だろうと思って開けてみたら、子どもの手紙でびっくりしました。何だかうれしくなりました。この活動を続けてください（30歳くらいの女性）

開けてみたら大切なものが入っていました。ありがとう。（30代男性）

（集計：横須賀（祥））

考察とマニュアル



まとめのまとめ

本プロジェクトの意義と到達点を確認してみよう。

企画の意図や実践過程の問題点などを割愛して検討すると、次の二点が最も大きな意義であったと理解できるかもしれない。

- 1 「学力」が人間を比較する尺度として機能する現代社会の中で、人間が数多の人間関係の中に生きる「社会的動物である」という事実を、参画というプロセスの中で主体的に認識することが第1の意義である。

学力内容の中心を占める科学的認識やその手法は、未熟な種である人間が地球上で生き抜くために培ってきた体系的知識や技術そのものである。言い換えれば、多様な人間が多様な分野で積み重ねてきた「幸せの処方箋」である。したがって、子どもの社会化には不可欠なものであり、習熟度として比較されることが本旨のものではない。しかし、偏差値という言葉に象徴されるように、「学力」が人間を比べる道具として独り歩きを始め、子どもの学習の意味を歪めつつあるのが現状である。

本プロジェクトは、見えなくなった（隠し始めた）社会的関係を、子ども自らが発見し、確認するプロセスを模索した。それは、ケペル先生が教えた「人間関係網の目法則」を再確認することであり、その「関係に生きている自分」を発見する冒険を演出する作業だったかもしれない。

- ①「比べる」ことではなく「つながる」こと
- ②「つながっている」ことの発見から「自分」「私たち」を発見すること
- ③「かけがえのない自分」の確認から「かけがえのない他者」を発見すること

「無縁社会」と称される現代社会の病理は、子どもたちの社会化に大きな影を落としているに違いない。その背景に「ものさし」化した学力が働いている。だからこそ、人間は社会的動物として地球上で生き抜いてきたという素朴な事実を再確認する過程が不可欠なのだといえる。「学力」（科学）は社会的に生きる道具にほかならない。

したがって、誇張して表現すれば、本プロジェクトの第1の意義は、学力に社会性を取り戻す試みであった。

- 2 「学力」が教えられるものとして提示される仕組みの中で、「教わるのではなく覚える」というプロセスを意図的に体験することが第2の意義である。

教えられた知識量が比較の尺度として機能する場合、多くの知識は共有というプロセスを省略して「自分のもの」として理解されがちである。そして、貯蔵した知識は、「自分のために」のみ活用されていく。しかし、多くの事実を積み重ねて科学的知識として集積してきたのが「学力内容」である。その過程には、情報の共有、知識としての共有、活用の共有など、「分かち合い」という

人間的手続きが不可欠であったはずである。

本プロジェクトは、参画という手続きを重視することによって、「分かち合い」に主体的に関わることを意図したものである。「自分のイメージ」を「みんなのイメージ」として共有することである。

また、主体的参画は企画者の思惑を超えて、活動が多様に展開する可能性を秘めている。その場合の対応こそが主体的学習を支える要であることから、本プロジェクトは、意図した企画がどう変化したかを見ることも重要である。

- ①学習に「主体的参画と発見」を組み入れること
- ②活動に伴う多様な変化（意図しない展開）への対応自体が主体性を保証すること
- ③「分かち合い」の人間的充足感を体感できること（振り返りと振り返った自分発見）

多様な事実に関心になっている子どもがいる。生きるための情報（科学）は与えられ続け、共有化されず、子どもの心象風景を寂しいものにしていく。発見する喜び、共有する喜び、活用する喜びが子ども世界には必要である。そのプロセスを実験的に展開したのが本プロジェクトの特徴だと思う。

誇張して言えば、学力に主体性を取り戻すことこそ本プロジェクト二つ目の意義なのである。



(文責：長谷川)

社会教育による地域人材育成の可能性とマニュアル化の課題

1 社会教育の可能性

今回のプロジェクトでは、どのワークショップも企画当初は大きな枠組みだけであり、スタッフとして参加するメンバーによってシナリオがつけられた。それは、スタッフの主体的参加を促し、スタッフの学びを深めた。また、担当ごとに独立運営された各ワークショップは、全事業終了後に、全体での振り返りが行われ、それが本プロジェクトの考察において重要な役割を果たした。

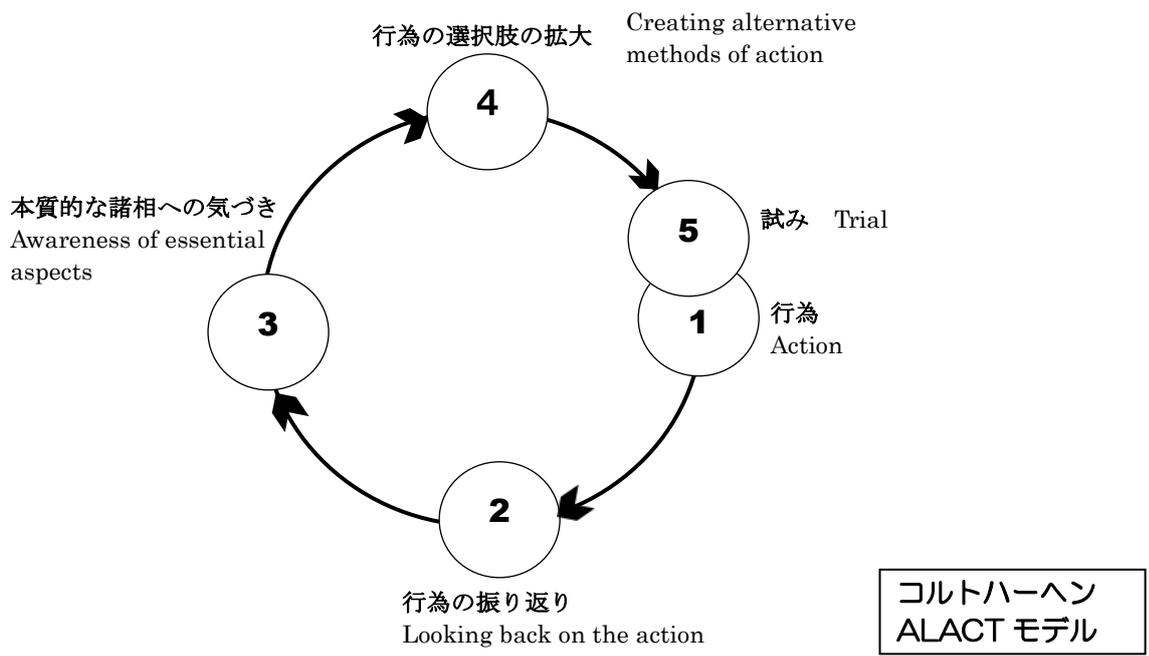
いずれのワークショップも2～3日の継続的实施、ないし参加者を変えての複数回の実施であるため、振り返りは次回の実践で施行され、プログラムを成長させていった。①何をしようとしたのか、②何が起きていたのか、③私は何を感じていたのか、④何を学んだか、⑤何を達成したのか、⑥面白かったことはなにか、⑦課題は何か、というような振り返りには、参加者も加わり、参加者の提案によってプログラムを変更し、その参加者が次回のスタッフとして活動する姿もみられた。さらに、参加者が今回のアイデアを発展させ、独自のプログラムとして主体的に実施することもあった。

社会教育の分野ではないが、『次世代育成支援対策推進法に基づく地域の子育て支援者研修のあり方に関する研究』（武田 2005）の意識調査では、支援者が望む研修、学びがあったと思う研修のどちらもが、自分が企画にかかわったものであった。リーダーとしての地域人材育成を社会教育が目指す場合、これらの調査は参考となるだろう。スタッフや参加者が、企画の内容にかかわることは重要である。丁寧に企画され、準備が行き届き変更の余地がなければ、ワークショップであっても、参加者は受け身のままにならざるを得ない。それは学び自体を消費していく危険性を孕んでいる。企画者がスタッフと丁寧に課題共有のプロセスを踏みプログラムを構成していくこと、実践においては、スタッフが参加者と実践課題を共有しながら双方向的な学びを実践することが必要だ。さらに実践を経た丁寧な振り返りを持つことで、課題への認識が深まり、参加者も巻き込んで「次の問い」を生み出しながら次の実践が行われる。それは、企画者が離脱しても学びが螺旋的に向上していくコミュニティを育てることであり、複数のリーダーが入れ替わりながら実践を継続させていく雁行型リーダーシップを実現する集団形成へのチャレンジでもある。手法は、ビル・リー（2006）のコミュニティ・ワークの基本①核となるメンバー（企画を理解できる少数の人たち）を集めること、②集まった人たちの価値観を尊重しその場から始めること、③反対の意見から学ぶこと、④徐々に拡大していくこと、を参照した。

社会教育による地域人材の育成は、知識や情報の伝達的な教育ではなし得ない。これからの知識基盤社会を生き抜く人材を育成するためには、学び続けるコミュニティを培うことが求められる。そのための社会教育には、参加者と共に、地域課題を探り、ともに学びを作り上げていくプロセスに注目しながら、かかわる人々をエンパワーする仕組みが求められる。ワークショップに必要なものは気づきを促す構造と視点を変えることを可能にする仕掛け、そしておもしろさだ。今回の企画では、普段見ている風景を変えるために、様々なメディアを活用した。その一つひとつが視点を変える可能性を持っている。マップづくりに活用したチェキ（インスタントカメラ）は、街の風景の構図（視点）に意識を集中させる。高度なテクニックを必要としないため、子どもでも大人でも高齢者でも同質の画像になり、その人の視点がクローズアップされることになる。また、その視点は

個人差が大きく、集団でマップにしていって過程で、その多様さが外在化されていく。手紙は、当たり前前に知り合いに出す手紙ではなく、誰か知らない人、をイメージすることで、いつもかかわっているのに意識化されていない誰かを意識化することを可能にした。「ラジオドラマ」ということで課題を共有することの難しかった街の音も、視覚を排除することでいつもは意識されない街の事実に向き合うものであり、CMづくりも観光プランも既存の視点を転換することを強く要求されるツールである。

参加者の主体性を尊重し、ともに学びをつくり、参加者をエンパワーできる実践を展開するには、社会教育に携わる者の専門性、力量が必要となる。まずは、企画者やスタッフが学び続けるコミュニティであることが求められるだろう。今回の実践を全国で展開することを考えれば、実際には、一つの社会教育団体が、これらの全部を実践するというよりも、2、3を選択し活用するのが現実的だと思うが、一見バラバラな実践、多様なワークショップから共通した課題に到達することもあり、どのような構成であっても、最終的には通年の事業全体をできるだけ多くの関係者で、様々なツールを活用して振り返ることが重要になる。それは、そのチームの課題意識を明確にすることになり、次の学びを考える上で有効であり、かかわる者たちの専門性を高めることにもつながっていくだろう。そこで起きた違和感や疑問、成功した理由などを、ALACTモデル（コルトハーヘン 2010）を活用して詳細に振り返ることも社会教育主事などの企画者やスタッフの力量を高め専門性を確立していくことに役立つだろう。



さらに、『子育て支援における研修のあり方に関する調査研究』武田信子（2006）が、支援者研修のポイントとして提示した10項目を参考として、社会教育の企画者、スタッフのあり方を考え、それを実践のベースにした。

- (1) 社会教育の目的は、社会に双方向的学び合いが広がり、社会教育団体が不要な社会をつくることにある。

- (2) 講座，研修はデザインするプロセスが重要である。
- (3) 講座，研修は参加者がつくるもの。
- (4) 講座，研修はわくわくするもの，参加者がおもしろいと感じるものでなければならない。
- (5) 社会教育主事，企画者，スタッフは参加者がエンパワーされる仕掛けをつくるのが仕事である。
- (6) 講座，研修企画者は参加者に聞くことから始めなければならない。
- (7) 講座，研修は出会いの場であり，関係をつなぐ場である。
- (8) 講座，研修は社会参加である。
- (9) 社会教育の講座，研修は，地域の日常の営み，参加者の生活を大切に考えるところから始まる。
- (10) 講座，研修は終わったときが，始まりである。

また，その報告書には，10項目を意識したモデルプランとして入れ子型の研修が提案されているが，今回の企画においても，ワークショップごとに幾度となく持たれたミーティングや講師との打ち合わせ，準備のための活動自体が学びの一部であり，実は入れ子型で，スタッフや企画者に大きな学びがあった。そして，その学びを徐々に広げ，出会いとつながりの場を作りながら，参加者とともに学びをつくることが可能となった。

参社会教育に携わる者が，単に教育を施す者としてあるのではなく，ともに社会を形成する一員として，参加者とともに学びの場をつくり，社会教育主事などの企画者やスタッフ自身がそこから学んで，ともに成長していく構造は参加者の環境統制感を高める。それは，社会の一員としての帰属意識を形成することであり，地域へのコミットメントを高め，地域への愛着形成，郷土愛にもつながっている。そこから観光を考え始めることこそが，地域特性を生かした地域の活性化を実現することになるとともに，これらを具体化し実践することが，これからの社会教育による教育力強化には必要ではないだろうか。

2 モデルプログラム

「チェキを使ったマップ作り」

対象：放課後子ども教室（子ども）＋学校支援地域本部（大人）

(1) 企画メンバーの募集

学校支援地域本部のスタッフやボランティアの中から，観光や街づくりなどに興味のある人を探す。

社会教育主事も含めて，最低3人の目標共有のできるチームをつくる。

*日頃からコミュニケーションをとっておくことが大事。

(2) 企画ミーティング（3回程度）

チーム内のコミュニケーションを図り，社会教育主事だけではなく参加してくれるメンバーと一緒に企画をつくる。

自由な発言のできる場を作り，ミーティングは双方向的な情報交流の場として運営する。

会議ファシリテーションの技術なども活用しながら，実践の目的、到達目標を共有確認する。

企画を作る際は，できるだけ過去の実践報告やアクティビティ集などを用意して，イメージ

を膨らませていく。

同じような企画の実践経験のある人をゲストとして招くのも効果的。

(3) スタッフの拡大と役割分担ミーティング（事前1回、当日1回程度）

学校支援地域本部の構成メンバー全員に、企画ミーティングの内容を伝える。

（事前にメールや紙媒体で全員に配布しておくのが効果的）

個人の特性に合わせて当日までの役割、当日の役割を分担する。

（できるだけ複数人でチーム分けする）

事前：広報、受付、プログラム作成、会場の手配・用具の準備など

当日：会場準備、受付、ファシリテーター、アシスタント、機材など

(4) プログラム作成

ワークショップの運営に興味のあるメンバーで、プログラムの構成をする。

(5) 広報

広報スケジュールをつくる。

広報手段を考える。

チラシを作るのか？電話でお誘いか？ポスターを作って掲示するか？メールやICTの活用か？

手段と対象に合わせた内容を吟味する。

実作業

(6) 参加を考えるワークショップ

学校支援地域本部構成メンバー全員が対象。

参加者との関係のあり方を共有するために「参加を考えるワークショップ」を開催。

(7) スタッフプレワークショップ

当日のプログラムを大人だけでやってみる。

(8) リフレクション

ファシリテーター、アシスタントへのフィードバック。

プログラムの見直し。

自分の役割の確認。

*リフレクションのファシリテーターが必要。

*まずはやってみた本人の自己評価を大事にする。

*批判的友人を心がけ、非難しない。

*各々が学んだものは何か？

(9) 子ども向けワークショップの実施

さあ、やってみましょう！

(10) リフレクション

様々なツールを活用して、当日の流れを振り返る。

ALACTモデルの活用。

(11) 中心メンバーのリフレクション

(12) 次へ

3 マニュアル化の課題

今回のプロジェクトでは、当初の計画としてプログラムの開発とそのマニュアル化が挙げられていた。しかし、実践を通して確認されたことは、プログラムの良し悪しではなく、プロセスの質の問題であった。実践プログラムは、道具に過ぎない。教材である。学びの質を向上させることに一定の役割は果たすが、それよりもその道具をどう使っていくかが大きな課題である。

だが、そのプロセスはマニュアル化できない。モデルプログラムに示した手順も、その通りに実践すれば上手く行くというものでもなく、実際、これだけ丁寧な手順を踏んで実践できる現場が全国にどれほどあろう。しかし、日本社会教育学会が『学びあうコミュニティを培う』知識基盤社会における社会教育の役割の中で主張しているように、社会教育主事や教員が社会教育のコーディネーターとしての役割を果たし、マニュアルを超えて、より実践的に、学びの場を市民と共に創出していくことが求められるのではないだろうか。

また、マニュアル化は思考停止を生むこともしっかりと心に留めなければならない。マニュアルがあることによって、省略されるプロセスの中にこそ学びと成長のチャンスがあることを理解してほしい。そして、誰もが学習者としてその場に立つこと、それが重要である。

本プロジェクトを採択した「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」のように、実践をしっかりと調査、研究し、記録として管理、公開することは、次の学びの可能性を広げる。全国各地の実践がデータベース化され、社会教育に携わる全ての者が活用できることが重要だと考える。各地に学びながら、地域特性を生かし、かかわる人々に主体的参画を促すことが可能になれば、地域の教育力が強化されるであろう。まずは、関係者とともに学び始めることから始めたい。

参考資料

- F. コルトハーヘン（武田信子監訳）2010『教師教育学』（学文社）
- OECD（立田慶裕監訳）2010『世界の生涯学習』（明石書店）
- 奥田睦子、子ども&まちネット2009『ヒア・バイ・ライト(子どもの意見を聴く)の理念と手法』（萌文社）
- 笠松和希、佐藤由美2008『持続可能なまちは小さく、美しい』（学芸出版社）
- 佐伯胖 1998『授業と学習の転換』（岩波書店）
- 佐伯胖 2003『学びを問いつづけて』（小学館）
- 武田信子 2005『次世代育成支援対策推進法に基づく地域の子育て支援者研修のあり方に関する研究』（こども未来財団）
- 武田信子 2006『子育て支援における研修のあり方に関する研究』（こども未来財団）
- ドミニク・S. ライチェン、ローラ・H. サルガニク（立田慶裕監訳）2006『キー・コンピテンシー』（明石書店）
- 日本社会教育学会編 2009『学び合うコミュニティを培う』（東洋館出版社）
- パウロ・フレイレ（小沢有作、楠原彰、柿沼秀雄、伊藤周 訳）2007『被抑圧者の教育学』（亜紀書房）
- バーバラ・ロゴフ（當眞千賀子訳）2006『文化的営みとしての発達』（新曜社）
- 蓮見孝 2009『地域再生プロデュース』（文眞堂）
- 浜田寿美夫、奈良女子大学子ども学プロジェクト2008『赤ずきんと新しい狼の世界』（洋泉社）
- ビル・リー（武田信子、五味幸子訳）2005『実践コミュニティ・ワーク』（学文社）
- 横石知二 2009『生涯現役社会のつくり方』（ソフトバンククリエイティブ）
- ロジャー・ハート（木下勇、田中治彦、南博文監訳）2000『子どもの参画』（萌文社）

参考サイト

NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会 <http://www.ojikajima.jp/>

青木将幸ファシリテーター事務所 <http://www.aokiworks.net/>

シチズンシップ共有企画 <http://homepage2.nifty.com/citizenship/>

地域ブランド調査 2010 http://www.tiiki.jp/news/org_news/13survey/2010_09_08tiikibrandsurbey2010.html

杖立ラボ <http://lab.tsuetate.com/?page=4>

杖立ラボ記事 http://kyushu.yomiuri.co.jp/entame/onsen/kemuri/ke_43_060426.htm

文部科学省 OECDにおけるキーコンピテンシーについて

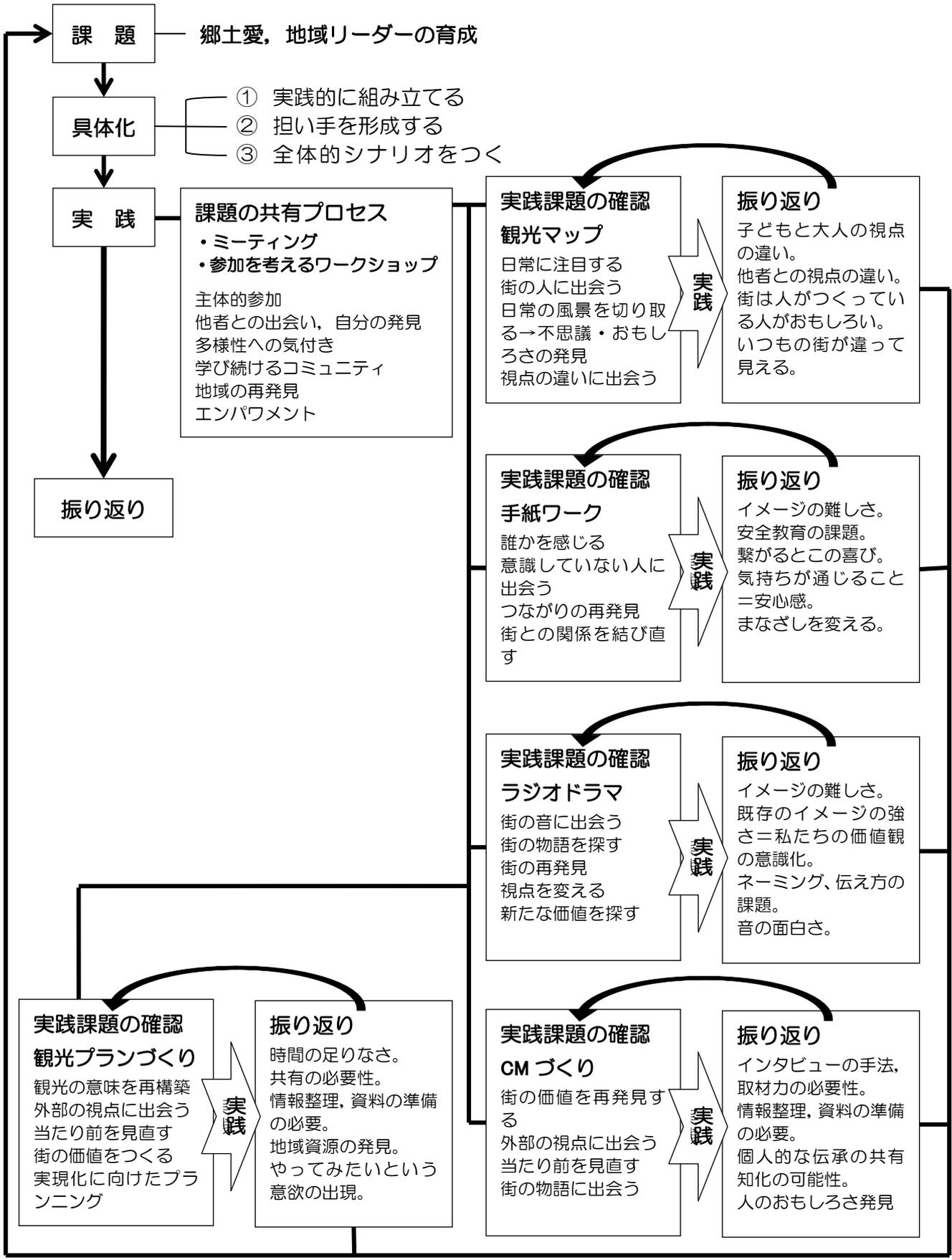
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/05111603/004.htm

水戸市統計 <http://www.city.mito.lg.jp/info.rbz?ik=1&nd=1567>

やるでないで上勝 <http://www.tm-i.net/kamikatsu/website.htm>

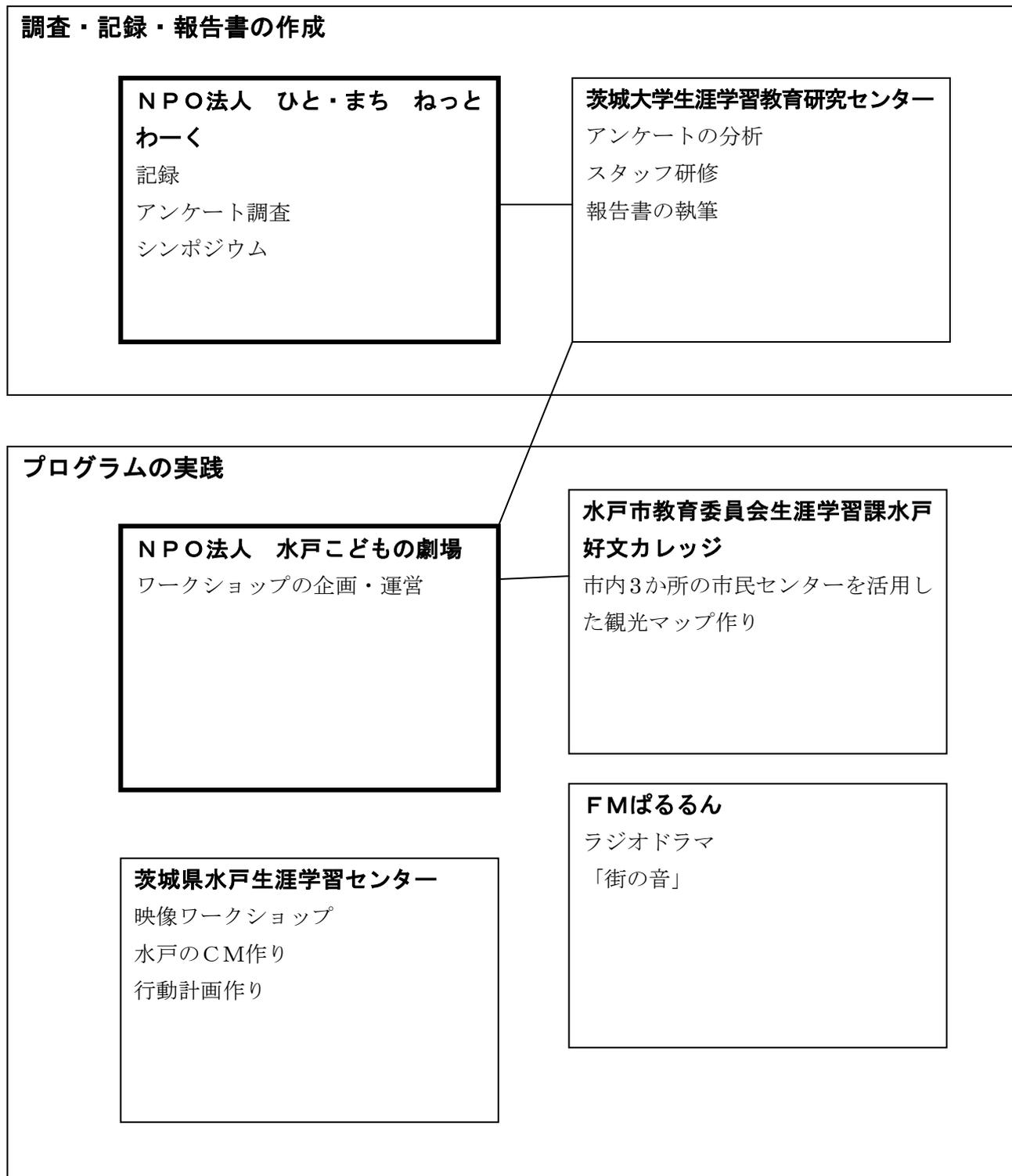
るーらる長崎 <http://www.pref.nagasaki.jp/tourism/news/?id=58>

若者の生活意識に関するアンケート調査 http://www.nri.co.jp/suhatsu/research/2008/pdf/rd200809_01.pdf



資料

資料1 実施体制図





Mito 応援プロジェクト Vol.1

水戸は、偕楽園、弘道館
だけじゃない！

私の暮らすまちには
とっておきの場所がある
学校の行き帰りの通勤の途中
なんだけかほっとする景色や
気になるものたくさん出会う

大好きな友だちと待ち合わせのお店や
一人でゆっくりくつろぐ場所
うれしいとき、悲しいときに行きたいところ
私たちが暮らしの中で大事にしているお気に入りの場所を
観光マップにまとめてみれば
いつもの街が違って見える

ゆるさと水戸の再発見！

毎日暮らしている町にカメラを持って出かけます。
ちよっと気になるあの場所を、ステキな写真にして地図の上に並
べてみましょう。
みんなで作ると、私の町の知らないステキに出会えるかも。
子どもだけでも大人だけでも、親子でもご参加いただけます。

1. 日時：2010年8月18日(水)、19日(木)、29日(日)
2. 場所：常盤市民センター、竹塚市民センター、内原中央公民館
3. 講師：安和人 (ワークショップデザイナー) 横須賀聡子 (ワークショップデザイナー)
4. 募集：小3~大人 各20名 (申し込み先着順)
5. 参加費：無料

主催：NPO法人 ひと・まち ねっとわーく
NPO法人 水戸こどもの劇場
後援：茨城県教育委員会、水戸市教育委員会
お問い合わせ・お申し込みは
NPO法人 水戸こどもの劇場 事務局
〒310-0911 水戸市泉和1-449-1
TEL/FAX 029-255-0908 e-Mail gekijo310@citrus.ocn.ne.jp

*この企画は、文部科学省生涯学習政策局「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」の受託により実施されます。



Mito 応援プロジェクト Vol.0

スタッフによる
スタッフのための
参加を考えるワークショップ

社会教育の中心的学びである「参加」を考え
自身の学びと地域の学びを参加の視点で見つめてみる

イギリスの青年協会が開発した
「ヒア・バイ・ライト」を参考にして
子どもたちや若者たちとともに学びあう関係を考える
多様な参加者が主体的に学び実践をつくるため
私たちがスタッフのあり方を確認、共有する

ともに生きる仲間として、学びあい、支えあう関係を築くために…

1. 日時：2010年8月8日(日) 10:30~15:00
2. 場所：水戸市福祉ボランティア会館 ミオス
3. 講師：桜井みどり (CAP スペシャリスト)、横須賀聡子 (ワークショップデザイナー)
4. 募集：社会教育による地域の教育力強化プロジェクトスタッフ及び社会教育関係者
5. 参加費：無料

主催：NPO法人 ひと・まち ねっとわーく
NPO法人 水戸こどもの劇場
後援：茨城県教育委員会、水戸市教育委員会
お問い合わせ・お申し込みは
NPO法人 水戸こどもの劇場 事務局
〒310-0911 水戸市泉和1-449-1
TEL/FAX 029-255-0908 e-Mail gekijo310@citrus.ocn.ne.jp

*この企画は、文部科学省生涯学習政策局「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」の受託により実施されます。

ラジオドラマ

を作ろう!

みとのおと

みとのおと + みとのおと の物語

学校からの帰り道、
仕事場への行き帰り、
私たちの周りにはたくさんのおとがある。
それは、私たちの街の音楽。
そして、この街にはたくさんのおとが隠れている。
耳を澄ませて聴いてみれば、おとの向こうにキラキラした物語。

5分間の街のおとを、5分間のラジオドラマにしてみよう。
今まで気づけなかった水戸に出会えるかもしれません。

- 水戸のおと物語のワークショップ
日時：2010年12月11日(土)12:30~16:30
場所：交流サロンのいばらき及び市街地(予定)
ファシリテーター：橋須賀聡子
- ラジオドラマ制作
日時：2010年12月19日(日)10:30~16:30(各グループ1時間程度)
場所：FMはるるスタジオ
講師&ミキサー：小川啓子氏

- 参加費：無料
- 募集：ラジオドラマ、街づくり、社会教育等に興味があり、両日とも参加可能な市民。(先着20名)
小学生3年生以上、大人。(小学生は保護者、またはそれに代わる大人の送迎が必要です)
- 主催：NPO法人 水戸こどもの劇場
NPO法人 ひとまち ねっとわーく

お問い合わせお申し込みは
NPO法人 水戸こどもの劇場事務局
TEL/FAX:029-255-0908 E-mail:gekijo310@citrus.ocn.ne.jp

この事業は文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」の委託を受けて、実施されます。参加にあたっては、簡易アンケートへの協力をお願いいたします。また、当日は記録のために写真を撮らせていただきます。写真は、主催者への報告書などに活用させていただきます。



てがみをくばろう!

おしごとがえりのおとなに、てがみをくばろう!

ひたち:1/19(水)17じはん
ばしょ:みとえき
ほしゅうにんずら:10にん



くわしいないようをしりたいたい子は、「水戸こどもの劇場 029-255-0908 橋須賀」まで
ねんらくをください!!!

観光 プランを 作るう

観光マップやまちのひみつ
ラジオドラマにCM作り
日常から水戸を見直してみると
いったい何が見えたのだろう？

観光は出会い
旅行者に出会ってほしい水戸とはなに？
いばらきの何を知らせてもらえばいいだろう？

わくわくと心がときめく観光プランを作ってみましょう！
親しい友人が訪ねて来るときのように

1. 日時：2010年12月16日(木) 13:00~14:30
2. 場所：茨城大学
3. 講師：長谷川幸介(茨城大学教員)、横須賀聡子(ワークショップデザイナー)
4. 募集：Mito 応援プロジェクト参加者 30名
5. 参加費：無料

主催：NPO法人 ひと・まち ねっとわーく
NPO法人 水戸こどもの劇場
後援：茨城県教育委員会、水戸市教育委員会
お問い合わせ・お申し込みは
NPO法人 水戸こどもの劇場 事務局
〒310-0911 水戸市見和1-4-49-1
TEL/FAX 029-255-0908 e-Mail gekijo310@citrus.ocn.ne.jp

*この企画は、文部科学省生涯学習政策局「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」の委託により実施されます。

みどの CM をつくらう!

誰にも教えたくない
私だけのヒミツの**みど**を
少しでも知らない誰かにちよっとだけ…
きれいな**みど**、おいしい**みど**、おしゃやな**みど**、
どこか懐かしい**みど**、ステキな**みど**の人、などなど、
私だけが知っている**みど**の私たち、
それをCMにしてみませんか？

- 第一回 2010年12月5日(日) 10:00~16:00 みと文化交流プラザ
第二回 2010年12月11日(土) 10:00~16:00 交流サロニーいばらき 大会議室
第三回 2010年12月12日(日) 10:00~16:00 茨城県水戸生涯学習センター(予定)
講師：ワークショップデザイナー
募集：映像、街づくり、社会教育などに興味のある市民(中学生以上、先着20名)
3日間連続で参加できる方を優先いたします。

参加費：無料
主催：NPO法人 水戸こどもの劇場
NPO法人 ひと・まち ねっとわーく
お問い合わせ・お申込み
NPO法人水戸こどもの劇場事務局 <http://www15.ocn.ne.jp/~gekijo/>
TEL/FAX：029-255-0908 E-Mail：gekijo310@citrus.ocn.ne.jp
●この事業は、文科省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」の委託により、実施されます。ご参加いただく皆様には、簡単なアンケートにご協力いただきます。また、実施期間中には、記録のために写真を撮らせていただくことがあります。その写真は、報告書や主催者HPなどに活用させていただきます。不都合のある方は、主催者までお申し出ください。

資料3 アンケート

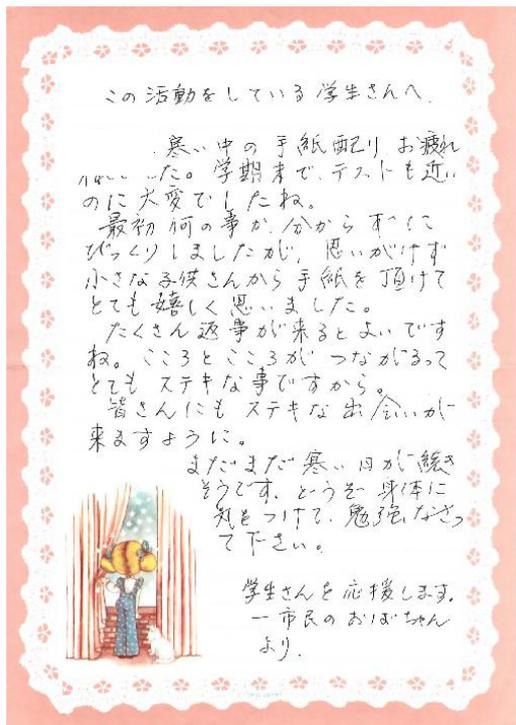
事後アンケート

1. あなたは自分の住んでいる町が好きですか？該当すると思うところにチェックを入れてください。
はい..... いいえ
2. あなたが誰かに自慢できるものが水戸市内にありますか？それは何ですか？
3. 参加して気づいたことは何かありますか？
4. 参加して学んだことは何ですか？
5. 何か感想がありましたらお書きください。

事前アンケート

1. 何を見てこの事業を知りましたか？
 - ① チラシ
 - ② 新聞
 - ③ タウン誌
 - ④ テレビ
 - ⑤ ラジオ
 - ⑥ ホームページ
 - ⑦ ブログ
 - ⑧ ツイッター
 - ⑨ 友人、知人の紹介
 - ⑩ 主催者からの紹介
2. どうして参加しようと思いましたが？（複数選択可）
 - ① ラジオドラマを作ることに興味があったから
 - ② 観光ということに興味があるから
 - ③ 街づくりに興味があるから
 - ④ 主催団体に興味があったから、以前参加したことがあるから
 - ⑤ 社会教育に関心があるから
 - ⑥ 文部科学省や行政がかかわっているから
 - ⑦ 友人に誘われたから
 - ⑧ その他
3. あなたは自分の住んでいる町が好きですか？該当すると思うところにチェックを入れてください。
はい..... いいえ
4. あなたが観光に行くとしたらどこに行きたいですか？
5. あなたが誰かに自慢できるものが水戸市内にありますか？それは何ですか？

資料4 市民からの返信

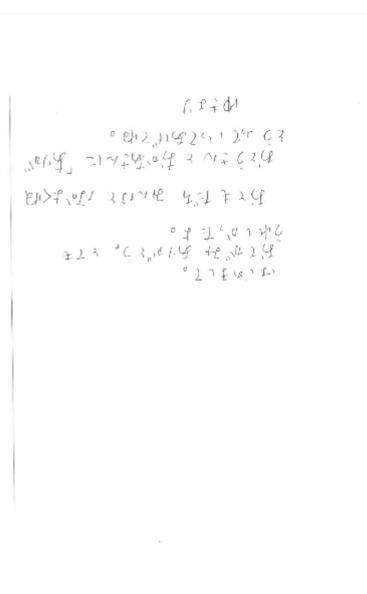
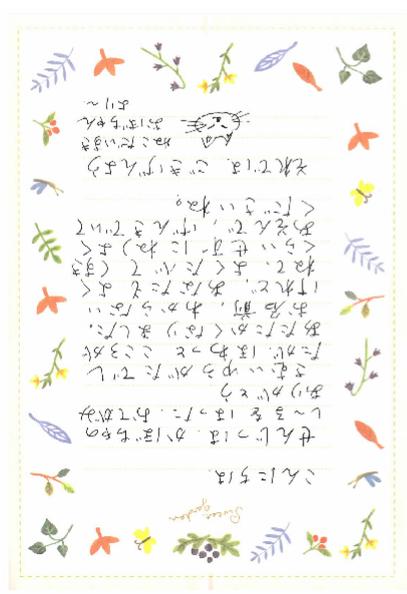


まいけん と おもたけへ
おつかい
おつかい ありがとう。 2月10日のこと。
おつかい たいへんで、うめい 2月10日のこと。
おつかい いたたいて、うめい 2月10日のこと。
まいけんも、おつかい たいへんで、うめい 2月10日のこと。
おつかい 2月10日のこと。



おつかい たいへんで、うめい 2月10日のこと。
まいけんも、おつかい たいへんで、うめい 2月10日のこと。
おつかい 2月10日のこと。
おつかい 2月10日のこと。

おつかい





せいのももはちゃんへ。
 ももはちゃん こんにちは。
 すぐきな おてがみありがとうございます。
 ゆたしは、「かとうあひこ」といいます。

ももはちゃんは、けんどうのめんしゅうをかんぱら
 「に、ほんいち」になるんだね。

ももはちゃんは、けんどうをやめるんだね。
 かとうさんも「せんしんけんゆうかひ」というところ
 で、けんどうをおしえてくれます。
 ももはちゃんは、なんというどうじょうにかはる
 りるのかな？

「に、ほんいち」になるには、いっしょうけんめいめん
 しゅうして、せんせいのおはなしをちゃんときいて、
 おおきなこえで、あへんじしてね。

そして、おともたちとなかよくね。

かとうさんも、ももはちゃんにまねするように、
 けんどうのめんしゅうかんぱらるね。

かとうさんのおうちには、「ゆうなちゃん」という
 1匹のおんなのこがいて、まいにち、
 げんきにあそんでいきます **mamegoma**
 まめゴマのシキモチ



mamegoma
 まめゴマのシキモチ



文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」報告書

発行 特定非営利活動法人 ひと・まち ネットワーク

〒 310-0053 茨城県水戸市末広町 3 丁目 7-13

電話&FAX 029-233-5200

info@hito-machi.net

<http://www.hito-machi.net/>

実施団体：特定非営利活動法人水戸こどもの劇場 協力：茨城大学生涯学習教育研究センター，水戸市好文カレッジ